

同人雜誌

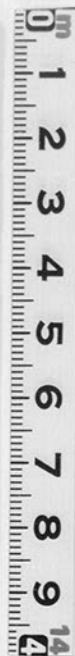
港

の

灯

創刊

新年號



謹賀新年

昭和二十四年元旦

硫酸硫安メタノール製造

日本水素工業株式會社

本社	東京事務所	福島縣石城郡小名濱町高山三四番地 電話(小名濱)二九一七、四六二、七番
社長	野精二	
常務	志摩英二	
常務	照井總治	
取締役	大場重光	
取締役	横井美徳	
監査役	田所	

東京事務所
電話(京橋)五五五、五二六、五三二、一〇〇番

目次

昭和二十四年一月號

郷土の言論機關に

灯の港

創刊 新年號

文藝に娛樂に

同人雜誌發行と小名濱町の文化水準……本誌主幹 東 義 將(二)

丸總組小野一君を語る…… 東 義 將(五)

短歌 秋 五 題……(七) 俳句…… 小 野 正 雄(三)
俳句……(二) 短歌…… 近 藤 正 雄(三)

事實小説 地獄船の六ヶ月…… 柏 浦 角 治(八)
短編小説 ポータブルの怪異…… 東 義 將(四)

短歌…… 瀧 端 滋 子(五) 詩 落 葉…… 華 星(六)

校舎倒潰問題に寄す…… 東 義 將(七)

野 郎 心…… T 生(三)

漫筆 町議列傳(二)…… あづま・よしまさ(四)

主幹 東義將君とその作品…… 新 妻 渡(七)

川 柳…… 齋 藤 光(四)

長篇小説 吹雪を衝く(一)…… 東 義 將(四)

會 員 録…… 鈴 木 三 男(五)
表紙執筆…… 小 野 豊(六)
發刊の感想…… 東 義 將(六)
編輯後記…… 東 義 將(六)

同人雜誌發行と小名濱町の文化水準

本誌主幹 東 義 將

小名濱町の文化水準低しとは、町民一般の人自からの解釋で有る。そのさ中に我々無名の輩が同人雜誌發行を企圖した事は、全く無暴で有つたかも知れない。併し自分の考へは今日迄そうした事業を起す者が無かつたが故に、人もついで來なかつたものとの解釋の下に、茲に非才微力乍ら、同人諸君と共に立上つた次第で有る。併し、やはり幾多の難關には逢着した。入會戴けた諸氏には申譯け無い言葉では有るが、幾度か途中に於て此の仕事放棄しようとか考へたか知れなかつた。曰く、入會者の僅少、甘く見た資金難、同人相互の力不足、實に寝ても睡れない夜も續いた。しかるに日數を閑す中、幸に識者の激勵も有り、打開の道も自から開けて遂に今日、發行部數五百を以つて、此處に發刊を見る事が出來た事は、偏に會員諸氏の御好意と御協力に寄るもので衷心から茲に御禮申上げる次第で有る。一人々々の入會者に、我々是如何に喜び、如何に感謝したかは、どうか切に御賢察願ひ度い處で有る、併し乍ら以上の發刊に對する我々の心勞は、偏に自からの微力の至す處で有つて、是を以つて小名濱町の文化水準低しなぞと勝手に斷すべきもので無い。併し、文化事業への關心なぞと云ふものは、案外持ちそうな人が持たないものでは有る。自分は初め、某氏から貰つた町會議員のさる有力者への紹介狀を携へて、その自宅を訪問したが、此の人と思ふその人が、此の我々の仕事に、否、文化事業への關心の余りに薄きに驚いてしまつて、自余の町議の諸公には、他の有力者の諸氏と共に、書狀を以つて御案内と懇請を申上げて置いた。しかるに、思はざりきと云ふか、果せるかなと云ふのか、遂にそれ等の人々よりは一通の回答にも接する事が出來なかつた。事實それ程期待も掛けなかつた。只、中には「會つてやるから來い」位のはがきの一枚も呉れる人が有るかとも考へた。

併し、無關心なのか多忙なのか、將又、我々無名の發起人に對し、「此奴何者ぞ」の感を持たれたものか、無關心は悲しむべき事では有るが、御自由で有る。併し、忙しいなぞと云ふ人間が此の世の中に有るべきもので無い。

多忙とは、一日の中の只時間的の問題である。發起人無名の点に至つては、出過ぎたる点と共に、實に慚愧に堪へぬものも有るが、併し、無名の輩に難事なりと思はれたら、有名人の御援助こそ又至當で有ろうとも考へる。我々は美名に隠れて不徳を成さんとするものではない。名ばかりの新聞を出して、只に金銭貰ひやに墮するが如き、三流四流の新聞にすら、數へ難きものとの同一視は願ひ度く無い處で有る。曾て筆者に對し、新聞發行を勧めて呉れた有力者も二三は有つた。併し自分は、その好意は多とするも、前述の如き新聞に墮するを怖れ、且は筆者の解釋とする處は、新聞とは飽迄ニュースのもので有つて、旬刊なぞでは、その効果並びに實績を果せるものとは考へられない。もしそうしたものを新聞として我々の手で發刊投入されたとしたら、町民諸氏が只迷惑される事は必然で有り、茲に於て自分はむしろ内容堅實の雜誌發行を決定して、同志諸君と共に今日此の舉に出でたものである。議員諸公並びに名士各位には遂に回答を戴けなかつた事は、一々參上懇願の態度に出るのが本當で有つたのかも知れぬが、此の邊に小名濱町文化の水準を云々されるものが残りはしないか。

文化への關心を持たれる人は、實に肩書や、門戸の大小に關はらない。それは請負業の諸氏に有り、商家の主人公の中に有り、事務執る室の一隅にも有れば、お醫者様の中に有るのだ。自分は初め此の仕事の出發に當り、大物訪問氏名羅列の行き方を排して、廣く御賛同を街中に求めた事が、今日此の成果を得た事と喜び、小名濱町の、文化の水準はいづれにしても、その關心は、必ずしも淺からずと前途大いに意を強くした次第で有る。

只此處に會員諸氏に深くお詫びしなければならぬ一事が有る。即ち、全篇殆どを筆者の記事を以つて埋めた事で有る。恐らく會員諸氏は一瞥して一種の不快をさへ感じられた事と考へる。是は偏に我々の力の至らざる處で有り勿論、筆者にしても決して快しとした事ではない。否、むしろ、こんな調子では「港の灯」永からずとも率直に考へた。勿論、是は投稿の僅少に有るのだ。會員處か同人そのものも二三の寄稿に止まり、遂に同人雜誌の本質に悖るものを作つてしまつた。實に慚愧の念に堪へず、深くお詫び申上げるもので有る。勿論、筆者は、諸所を歴訪し口を酸くして、寄稿を懇願懇請、是努めたもので有るが、遂に締切迄に此の有様で有つた。創刊號なればとの言葉も有るが、創刊號こそ大切なれ。筆者は曾て二十才位から、好んで同人雜誌を組織し、求めては他の會員とも成つた經驗を持つが、その當時は、入會應諾と同時に會員からの寄稿殺倒し、大いに誌上を賑はせたもので有つた。勿論當小名濱ででは無いが、是も時代の違つたせい、あるいは文化の水準に左右される處も有りはしないか、

中には投稿を依頼すると「どうも僕は文章が下手だし、人に見て貰へる様なものは書けないので——」などと、謙遜を含めたつもりで云ふ人もあるが、併し筆者は、それが二十を出ても一ツか二ツの年輩の人である場合、却つて筆者の方でその言葉に驚いてしまふ。考へても戴き度い。人生二十やそこらの年頃で、しかも既に學校を離れて實社會に働く人が、美文を書いたり、人を感心させたり、あるいはその書いたものに寄つて、天下の耳目を驚嘆さすとか、その文、實に警世に價するなどと云ふものが書けるものではない。第一書こうと思ふ方が無理である。少年の頃から大家の風をなした室生犀生先生や、文學少女の果から、猫もしやくしも御存知の石川啄木氏、あるいは、又毛色の變つたところでは、年少宇宙の不可解を不可解として、遂に華嚴の瀧へ飛込んだ東大文化の學生、藤村操の殘した巖頭の辭などは、確かに、何がなんだか判らないと、當時の人を驚嘆させたものには違ひない。此の他にもエライ人も妙な人も種々とあろうが、みんな出來が別である。勿論筆者は本誌會員から、藤村操の現はれるのは望ましくないが、第二の犀生、第二、第三の啄木の輩出は心からは是を希ふものである。それにしても自づから過程がある。どうか本誌への投稿に寄り、廣く批評も受け、又ある場合には活字に成つてから見た我文への反省等もされて、本誌を以つて諸氏の文筆研鑽練磨の道場共して戴き度い。又同人雜誌の面白味も實にそこにあるのである。書けないなどの先入主は、此の際速かに捨て、戴き度い。諸君の受けた作文第一歩の小學校の教育法が誤つてゐたのである。一時間とか云ふ限定された時間の中の課題の下に、一ツの文を締めるなどと、それがそも／＼無理な註文であつた。だからこそ若い諸君に少年の頃の無理の苦勞が永く祟つて、妙な先入主が植え付けられてしまつたのだ。併し、現在の諸君には、限られた時間も無く、題材、筆法又自由で、何等そこに制肘を受けるものは無いのである。どうか安心して振つて御投稿を願ひ度い。諸氏の投稿を期して待ち、次號に於ては、必ずや面目を一新出来るものと信じてゐる。

思へば、戦火の日既に遠く、夜毎、港の燈臺に赤き灯の点じられ、船のしるべとなるも既に久し、此の秋、諸氏の御協力に依り、郷土に同人雜誌「港の灯」の發刊を見たが、此の灯、郷土のしるべとして、永く輝き續けるか、あるいは半にして、かき消されてしまふものか、それは一ツに、我々の努力如何にある事は言を待たぬが、又町民諸氏の御協力如何にあるとも云へるのだ。兎に角「港の灯」の輝き具合で、小名濱町文化水準の高低を問はれる事は事實であらう。

—「完」—

丸總組 小野一君を語る

東 義 將

小名濱町の顔役小野一氏が暴力團として檢舉を受けたのが十一月七日、同月十八日、數々の罪名の下に、遂にその起訴を見るに至つた。當局、此の度の、腹を据えての積極的、且徹底した矢つぎ早の暴力團狩りには、世人は同氏に、罪ありと知ると知らずとを問はず、又その被害を受けた受けざるに關はらず、顔役としての同氏を、暴力團に直結させての考へ丈でも、同氏の檢舉を、今更奇とした者は一人もあるまい。又此處に於て何人も、暴力が物云ふ時代は既に過ぎたとの感を深くしたものに違ひない。

併し平の川和徳一氏はさてをいて、筆者は未知の東京の親分連中、あるいは福島市の北島氏等に就いては、語るべき何物をも持たないが、尠く共、當地の小野一氏個人に對しては筆者の考へでは、必ずしも凡ての人が、同氏を以つて根本からの惡の存在なりと斷定したものであるまいと思ふ。

如何となれば、筆者は土地のある程度の年輩に達した人々の間に、青年期迄の小野一氏を語るのを聞いて、是を惡しざまに云ふ人を曾て知らず、むしろ同氏の昨日迄の親分として

の立場を「彼、誤れり」として、同氏の爲に惜しむ人の余りに多きに、一種の感慨にさへ打たれたものである。筆者も同氏の性格を知る一人として思ふ事は、小野一氏が昨日迄の同氏が形作つてゐた立場と云ふものは、初めから、氏の眞の性格に反して、同氏が宿命的に踏入つた邪道とも云ふべきものだと思つてゐる。今日、新聞紙上に發表された罪の数々も、同氏のそれ迄の立場がなした事であつて、決して彼個人の性格の表はれとは筆者には考へられない。小野氏が、自分こそ小名濱の爲に成れかしと、我身こそ小名濱町發展に寄與せんと、常に心がけ、且は實踐してゐた事も絕對の事實で、遂に今日の自身の立場を招いた事は、同氏の爲に、事、志しと違つたものと云ふべきであらう。成程、同氏の乾分の連中の中には、事實惡いのが存在した。又同氏の乾分ならざるに同氏の乾分の如く装つて町うちに於て惡をなし、第三者から同氏にさへ、不良と何等異なる處の無かつた輩も事實ありて、虎の威を借る狐と云ふのか、親の心、子知らずと云うのか、常に我物顔に三人四人と圍まつて街路行く姿を傍見した丈でも、筆者などは彼等の親分小野一氏の名を汚すものとして、心からは愛へた一人でもあつた。心なく、且、年も若かつた彼等乾分の輩が、又、乾分と誤られた不良共が、今日迄、町うちに迷惑を掛けたり小なり小なりの問題が、凡て今日の小野一氏の惡名を募らせる因に成つた事も亦事實であらう。併し同氏が、そ

うした不良ばかりか、乾分をさへ制禦する事をしなかつた事は、顔を賣る人として、かゝつて同氏の責任にある事も否めない事實で、その誘いを同氏一人に受ける事も、亦當然として止むなき事だ。只小野氏が、こうした乾分連中の惡を一層助長させたなどとも考へられぬし、又、惡を制するに惡を以つて爲す講談本、又は小説、映画、浪花節に登場する、一般が誤つてその義、德、俠を稱へてゐる空想人格の、そうした親分以外の親分なるものゝ惡の實體を、同氏が性格的に持ち合はせてゐなかつた事も考へられる。今日、世の暴力團にしてその檢舉を見た者の中には、その罪狀、徹頭徹尾、私利私慾に出發して、例へば遠隔の地の出來事と云へ共、その罪狀只、醜惡にして義憤を感じ、又、天晴れ天下の名譽職が、實に信すべからざる罪名の下に檢舉を見て、世人は只、淺聞しゝとして目を蔽ふ中に、今日新聞紙上に列記された小野氏の犯罪を一べつするに、その罪、惡辣にして萬人共に憎み、衆亦、是を輕侮すと云つた様な破廉恥のものを一ツも見ない。是は一ツに同氏の性格の證左でもあり、せめて同氏の爲にも、亦小名濱町民の爲にも、筆者の心から喜ぶ事の二ツである。

その犯罪内容に就いては、詳しく批判する事は許されまいが、少く筆者の感想を述べれば、例へば鈴木大助氏問題の如きは、小野氏其の他の暴力行爲は、確かに天人共に許さざるやうなものであつた。併し茲に思ふ事は、何故に旅館の主である鈴木氏が、臨港鐵道接接地問題にからんで、かくも問題をか

もす迄にそれを拒んで、右の權利の守得に努め様としたものか、筆者などは、自分がやろうとした事で人も人が望んでそれが公益に成る事であつたら、自分がやらずとも誰がやつても良いではないかとの考へを持つてゐる。まさか鈴木氏自身が顔を賣らうと計つたわけではあるまいが、筆者は今日尙、鈴木大助氏の當時の心境が那邊にあつたのか、その解釋に苦しむものである。丸通、吉田倉長殿打事件などに至つては、筆者は今更何をか云はんやである。只小野氏の爲に、その採つた行動を偏に悲しむばかりである。如何となれば、同氏にしろ、小野禮一氏にしろ、丸通、吉田倉長に對しては、恩怨共に無かつた筈で、それ處かおそく未知の間柄でさへあつたのではあるまいか。只臨港鐵道、宮内思吾氏が吉田氏と事を構へ、暴には暴に報ゆるの、その尻ぬぐいを、名もあり顔もある兩氏が、遂に是を勤めたる結果に他ならず、凡ては他人の感情問題に巻き込まれての、實に殘念なる犠牲なりと筆者は是を斷じるものである。

併し乍ら罪は罪、事情の如何を問はず、事、犯罪と銘打たれたるものに、おそらく人の諒とするものがあるわけも無く、筆者も亦小野一氏の行爲を決して是認するものではない。筆者は暴力團檢舉に對しては、双手を舉げて是に賛成、現在小野一氏の檢舉によつて、鳴りを靜め、姿を消した。曾ては濱風組などと呼ばれて横行跋扈した不良の輩、筆者は彼等不良にたばこ一本無心された覺えも無く、その直接の被害を受けた事

もなかつたが、彼等の暴狀は實に街内に滿ち、彼等の横暴に泣いたる者の如何に多き事か、實にその小惡振りに至つては到底丸惣組もその比で無かつた事は、當局に於ても先刻御存知の事と信じてゐる。彼等不良の輩が、今日こそ逼塞して姿を見せずと云へ共、是非にその、徹底檢舉根絶を得て、町民をしてその生活に安きを得させられ度い。彼等にしても此の際一應身を洗つて、出直して更生すべきが本當だ。此處には筆者は只、個人小野一氏の眞の本体を語り、同氏が惡のかたまりならざる事を述べたものに過ぎず、況んや今日の社會に、親分乾分の組織に基づく團體が、その内容是如何にとあれ凡そ百害あつて一利あるを知らず、小野一氏の團體も、早く、その解体こそ願はしい事であつたのだ。又考へ様によつては小野一氏自身、既に是に氣付いてゐたものではあるまいか。情性と因襲が今日迄の同氏をして自縛自縛となさしめた感、必ずしも無しと云えない。

故に今更筆者が云ふべくもないが、同氏も晴れて歸濱のあかつきは、必ずや一大轉向の下に、再出發する事も信じられる。その時こそ小名濱町民も同氏と共に手を携へて、大、小名濱發展の爲に共に協力されん事を、筆者は衷心からそれを望むものである。

又、不幸にして、現在同氏を、又同氏と關連する人々を、敵とする氣持ちを持つ人があつたとしたならば、何卒、此の際、相互に寛容の氣持ちを持つて、町民にのみ迷惑の累を及

ぼす争は速かに捨て、凡ては、大小名濱建設の爲に心からなる握手をされん事を、筆者は切に望んで止まず、又、大小名濱の天地に、速かに明朗なる氣こそみなぎれと、切に希つて此の筆を擱くものである。

(三三、一一、二五)

【短歌】

秋五題

小野正雄

陽のかける裏山ひとしゆれうごき

秋雨くるらし雲はしりゆく

落葉焚く煙の末をみつめては

はかなく歩むわれに涙す

往く末を思ふことなく振りすて、

何か憤る如く今日も書めくるわれ

それとなく落葉の音を數ふこと

まどろみ居りてこゝろ和らぐ

夕づきの秋枯れみちを語りゆけば

山影寺に燈のともりける

事實小説

地獄船の六ヶ月

柏浦角次

海に出る事を稼業としてゐる人の多い土地では別かも知れないが、現在三十過ぎから、四十前後の年輩の人は、過去に一度は船員生活に、あこがれを持った時代をお持ちだろうと思ふ。例へ自分がそんな氣持ちを持たなかつた人にしろ、きつと身近かにそうした人を御存知に相違ない。それは、過去の流行歌の中に、如何に船員の生活を歌つたものゝ多かつたかを思へば良く判る事で、そうした歌は船乗りばかりか、一般の人が、男も女もその曲と共に、その歌詞を愛して流行したものだつた。

併し自分は、それとは全く別に、實に思ひ掛けない成行から、あこがれなぞを持つ處か、むしろ自分の意志にさへ反して、遂に妙な船で味はつた六ヶ月の船員生活をお話仕度い。自分は少年の頃から人一倍犬を愛して、昭和十六年に、當時で七十五圓と云ふ犬を買つて、デヨンと名付けて可愛がつ

てゐた。何しろ、ビール一本六十錢、米も一升三十錢は出なかつた筈で、たばこも元のチェリーが十二錢、パットが七錢と記憶してゐるが、當時の七十五圓は高級のサラリーマンの一月の収入にも當つてゐた。當然、閑など云ふ事は考へられない時代の事だ。併し、おさまらなかつたのは親父で有る。親父は別に犬の値段で腹を立てたわけではなかつたが、自分が余り犬を愛する事が親父の氣に合はず、いつも自分の愛犬デヨンを中心に家中の争いがくり返へされた。そんなわけでは自分は遂にデヨンを連れて家を出てしまつた。「家無き子」を實行したわけだ。自分は犬可愛さに旅の空の飲食店を求めては、犬にも食はすと云ふ條件で、無給で働く生活を續けてゐた。無論、そんな生活では、金も有るわけもなく、やがてどうにも成らない日が訪れた。當時自分は、會津の喜多方地方をさまよい歩いてゐたが、段々やせ細るデヨンの姿を見て、その哀れさに意を決して、フト知つたその地方の豪農の家に、デヨンを無償で興へてしまつた。

愛犬と別れた自分は、身の振り方にも困つたが、家に歸る氣にも成れず、併し足の向くのは、やはり懐しい小名濱の地だつた。處が小名濱に戻つて二十日目頃に自分は、或る夜町のカフェーで、カムチャツカ行の人間を募集してゐる一人の船員と知り合つた。そこで自分は、半、夢中で、その男から三百五十圓の金を借り受けた。

併しこんなに成つた自分ではあつたが、會津で別れたデヨ

ンの事が忘れ兼ねて、その金の中から百五十圓を割いて、會津のデヨンの居る家に送つて、改めてデヨンの愛育を頼んでやつた。その間にも日が経つて、約束の出発の日は迫つて來た。併し小名濱で乗船するわけではなく、函館から乗船する事になつてゐた。今更どうにもならなくなつた自分は、やがてやぶれかぶれの氣持ちで函館に向ひ、六月の五日に、遂にそこから海運丸と云ふ三千噸の船に乗り込んだ。船はカムチャツカ通いの運送船だつた。

出航迄に五日間もあると云ふのに既に下船は嚴として許されない。處が出航前夜、船中で改めて一同の顔合はせがあつた。乗組總員三十余名が、それ／＼に立つて自己紹介を行つたが、順れた船乗りは、船員の挨拶、つまりマドロスの仁義を切つた。その様子は、普通の野郎、つまりテキヤの仁義と變りはなかつたが、その當時は、そんな事を見た事もない十八才の自分は、只無氣味さに怖れを抱くばかりだつた。

自分は、その時の、その中でも、次の三人丈が特に印象に残つた。それは船長の五十七八のMと、Kと云ふ二十三、四の一寸ばんやりした様な料理人、それに「いるか」と云つて紹介された自分より一ツ上の、十九才の美少年のヨックだつた。尤も自分も仕事は「いるか」と同じヨックだつたのだ。

先に船長の口から「いるか」を紹介された時には「いるか」と云ふ名前を一寸妙には思つたが、併し自分は、あく迄それを本名だと考へてゐたのだ。處が自分がその「いるか」が仇

名である事を知つたのは、半年も後の事で、しかもそれが動機となつて自分は下船したとも云へるのだ。

さて話は後に戻つて、船が函館を出航してから、四五日目の晩だつた。男ばかりで、一人として女の乗つてゐない筈の此の船に、忽然として一人の美少女が現はれた。どうして乗つてゐたのか、又どんな事情の女なのか、兎に角自分が初めてその姿を見たのは、船長の室の前を通つた時に、開いてゐたドワーの向ふに見たのが最初だつた。洋装の頭に造花をさした、確かに美しい娘だつた。

自分は驚いてすぐ調理室に戻つて、古参の「いるか」にその事を知らせようとしたが、そこには彼の姿が無く、いつ迄経つても「いるか」は戻つて來なかつた。つまり、その美少女が「いるか」自身であつた事は、賢明な讀者は既にお判になつた事と思ふが、自分は調理場に「いるか」が、否その美少女が現はれた時には、十八才の少年の自分でもさへ、思はず頬を赤らめ、胸の高鳴るのを覺えた程「いるか」の女としての姿は、巧みな、いや、事實女に、なり切つてゐた。普通男の中では、長い位の黒い髪の毛を上手にかき上げて、造花の赤いかんざしをさした具合から、なで肩にしつくりと合つた洋装、色白の顔にはほんのりと白粉をはいで、可愛い口唇に赤い口紅を余り毒々しく塗つた具合を見ては、もし自分が彼より年上で、又古参の立場であつたとしたら、思はず抱きすくめたい位の衝動にもかられた事であらう。

只、夜の間丈でも「いるか」と別れて彼におどかされる時間の無い事を喜んだ。事實、陸の生活では角力を取つても自信のあつた自分は「いるか」位を一投げにする事はわけはなかつたが、船では新参、古参の區別は大變なものだつたし、又現在の「いるか」に、もし自分がそんな事をしたら、それこそ一大事件が起きたに違ひない。

自分は「いるか」の女、妾には無關心だつたし、むしろ願ひつこになつてしまつてゐた。又人に「いるか」が船長と同じベットに休むと聞いても、エロ雑誌によつて、上野の森の夜の姿などを知らされる現在の青少年と異つて、當時の自分には、そんな事に氣を廻す妙な知識は持ち合はせてゐなかつた。

船員が、海豚（イルカ）を釣り上げる事に満足し、何も知らぬ自分が海豚の調理に、あき／＼して、他の魚の釣上を請求すると、腹立たしげな目付をされても、そこに何があるのかも氣付かなかつた。

十月の末になつた。ある夜だつた。晝間の働きに疲れきつた自分としては珍らしく夜中に目を覺ました。自分は用を足すべく室を出て、調理場横の食堂を通り抜け様とした。するとそここの隅にしゃがんだ二人の人影があるのに氣が付いた自分は、はてな、此の夜中に誰が何の様に來たのだらうと、うす暗い電氣の灯で瞳をこらした。處がそれは思い掛け無く船長のMと女妾の「いるか」の二人だつた。二人は、自分がそこに立つて居た事を更に氣付かなかつた。

それから後の「いるか」はブーと女の姿のまゝでゐた。處が、此の二三日何となく荒んで來た様な船員達が、たしかに和んで來たのが若い自分の目にも良く判つて來た。乗組員のある者は「いるか」に色目を使い、女としての可愛い美しい顔を、あかす眺める者も居たし、中には「いるか」の優しいナデ肩に手を振れて満足してゐる様な者も現はれた。何故こんな馬鹿げた事が行はれたのが、月日が経つて連れて自分にもそれが段々判つて來た。それは此の船は、船がカムチャツカに着いても、又函館に戻つても、船員は船長の他には、殆ど下船を許される者が無く、況して募集で來た乗員は、激しい冬を迎へる迄の約束の七ヶ月を過ぎる迄は、一回の下船も許されない事だつた。併し募集に順れた連中は、既に初めから、その事を承知してゐて、異性を目に振れる事の出來ない生活を覺悟して、それ故に「いるか」の女としての出現は乗船者凡ての希望であつたのだ。

併し乗組員の作業の、その労働振りは實に激しく、又苛酷なものだつた。實に一同が云ふ様に確かに地獄船の名に反かないものだつた。荷を積んだ船が、その労働以上に怖ろしい海暴れと闘つて、カムチャツカに着いた時でも、いつも陸地を遠く離れて停船し、船荷は夜の闇に紛れてチャツカボートで運ばれて行つた。當然税關に對しての警戒も嚴重を極めた。それ丈に此の船が何を意味するのかは、讀者にもお判りだろうが、それは大して此の話に關係もないから詳しくはこゝに

自分はいぶかつて、自分の方に向つてしゃがんでゐる

「いるか」の足下を見て驚いた。確かに、彼の足下のタホルにくるまつたものは、晝間からそこに置かれてゐる、二匹の中の一匹の海豚だつた。此處に於て自分は、初めて「いるか」が海豚（イルカ）に試み様とする事がハッキリと呑み込めた。本名の「いるか」は、今こそ彼の本性を現はして、本物の海豚を今彼は、一人の異性として扱つてゐるのだ。海豚の一部分が女性に通じるのかどうかは自分は知らない。只海豚が温血で有る事は事實だ。船長は「いるか」の背後に立つてニヤ／＼とした笑みさへ浮かべ、やがてたばこに火を付けた數日を過ぎて、例の十一月三日の明治節が來た。その夜は船の中で宴會が開かれた。自分は命令で女に粉裝した。彼等は、自分が白粉をつけ、口紅をさした顔立ちに、手を打つて喜び「いるか」とは又異つた感じの美人だと満足した。自分は彼等の望むまゝに、いつも化粧した顔で自分の仕事に就いてゐた。

併し自分の決心は既に定つてゐた。――下船脱走するのだ。先夜の事を見た自分は、つく／＼と自分の居る世界で無いと考へた。

やがて十一月二十日頃、船は函館の港に入つた。既に約束の期限は過ぎてゐるのに一人も下船は許されない。只、働き過ぎに成つてゐる者丈に、それ／＼金丈は渡された。自分も僅か乍らその一人だつた。併し離船する事は承知されない。

書かない。二ヶ月、三ヶ月、そして四ヶ月、自分は女も何も考へぬが、只陸地にあこがれた。僅かの時間で良いから此の足で大地を踏みたかつたのだ。併し乗組員達は只激しく働いてゐた。只、短い時間の休み時に、古く汚れたまつた一つの双眼鏡を變り／＼に目にしては、陸地を眺め、もしそのレンズにチラリとでも女性らしい者の姿でも認めれば、その一つの双眼鏡の激しい奪い合いだつた。併し此の地獄船は、映画や小説の中にある様な、乗組員同士の闘争などは少しも見られなかつた。そんな事は許されず、ひたすら労働を強いられた。皆疲れ切つてゐて、喧嘩なぞする氣力も無かつたと云ふのが本當だし、又むしろ船員同しは、互に慰め合ひ、勞はり合つてゐた位だつた。尤もこう働かされるのも一方では無理もなかつた。何故なら、自分の様にコックと云ふ仕事にさへ、三百五十圓と云ふ當時としては大金を貸された位だから、労働する連中の借金は、確かに大きな金額に相違なかつた。何しろ自分は乗船前に、百圓の金で、先づ五十圓で背廣一着を作り、十八圓で最高級の靴を買ひ、尙、腕時計を買つて、その百圓が余つたものだつた。

かくして苦痛の五ヶ月程が過ぎた。「いるか」に丈は船長はちめみんな優しくかつた。成程それなればこそ、彼も十六の年から三年間の間、こんな生活も「いるか」には出來たのだ。云い遅れたが「いるか」は女裝してからは、その寝る場所を船長の室に移してゐた。併し何も判らなかつた自分は、

それから後の「いるか」はブーと女の姿のまゝでゐた。處が、此の二三日何となく荒んで來た様な船員達が、たしかに和んで來たのが若い自分の目にも良く判つて來た。乗組員のある者は「いるか」に色目を使ひ、女としての可愛い美しい顔を、あかす眺める者も居たし、中には「いるか」の優しいナデ肩に手を振れて満足してゐる様な者も現はれた。何故こんな馬鹿げた事が行はれたのが、月日が経つて連れて自分にもそれが段々判つて來た。それは此の船は、船がカムチャツカに着いても、又函館に戻つても、船員は船長の他には、殆ど下船を許される者が無く、況して募集で來た乗員は、激しい冬を迎へる迄の約束の七ヶ月を過ぎる迄は、一回の下船も許されない事だつた。併し募集に順れた連中は、既に初めから、その事を承知してゐて、異性を目に振れる事の出来ない生活を覺悟して、それ故に「いるか」の女としての出現は乗組員凡ての希望であつたのだ。

併し乗組員の作業の、その労働振りは實に激しく、又苛酷なものだつた。實に一同が云ふ様に確かに地獄船の名に反かないものだつた。荷を積んだ船が、その労働以上に怖ろしい海暴れと闘つて、カムチャツカに着いた時でも、いつも陸地を遠く離れて停船し、船荷は夜の闇に紛れてチャツカポートで運ばれて行つた。當然税關に對しての警戒も嚴重を極めた。それ丈に此の船が何を意味するのかは、讀者にもお判りだろうが、それは大して此の話に關係もないから詳しくはこゝに

書かない。二ヶ月、三ヶ月、そして四ヶ月、自分は女も何も考へぬが、只陸地にあこがれた。僅かの時間で良から此の足で大地を踏みたかつたのだ。併し乗組員達は只激しく働いてゐた。只、短い時間の休み時に、古く汚れたたつた一つの双眼鏡を變り／＼に目にしては、陸地を眺め、もしそのレンズにチラリとでも女性らしい者の姿でも認めた時は、その一ツの双眼鏡の激しい奪い合いだつた。併し此の地獄船は、映画や小説の中にある様な、乗組員同士の鬭争などは少しも見られなかつた。そんな事は許されず、ひたすら労働を強いられた。皆疲れ切つてゐて、喧嘩なぞする氣力も無かつたと云ふのが本當だし、又むしろ船員同しは、互に慰め合ひ、勞はり合つてゐた位だつた。尤もこう働かされるのも一方では無理もなかつた。何故なら、自分の様にコックと云ふ仕事にさへ、三百五十圓と云ふ當時としては大金を貸された位だから、労働する連中の借金は、確かに大きな金額に相違なかつた。何しろ自分は乗船前に、百圓の金で、先づ五十圓で背廣一着を作り、十八圓で最高級の靴を買ひ、尙、腕時計を買つて、その百圓が余つたものだつた。

かくして苦痛の五ヶ月程が過ぎた。「いるか」に丈は船長はぢめみんな優しくかつた。成程それなればこそ、彼も十六の年から三年間の間、こんな生活も「いるか」には出來たのだ。云い遅れたが「いるか」は女裝してからは、その寝る場所を船長の室に移してゐた。併し何も判らなかつた自分は、

只、夜の間丈でも「いるか」と別れて彼におどかされる時間の無い事を喜んだ。事實、陸の生活では角力を取つても自信のあつた自分は「いるか」位を一投げにする事はわけはなかつたが、船では新参、古参の區別は大變なものだつたし、又現在の「いるか」に、もし自分がそんな事をしたら、それこそ一大事件が起きたに違ひない。

自分は「いるか」の女、妾には無關心だつたし、むしろ願つてしまつてゐた。又人に「いるか」が船長と同じベツトに休むと聞いても、エロ雑誌によつて、上野の森の夜の姿などを知らされる現在の青少年と異つて、當時の自分には、そんな事に氣を廻す妙な知識は持ち合はせてゐなかつた。

船員が、海豚（イルカ）を釣り上げる事に満足し、何も知らぬ自分が海豚の調理に、あき／＼して、他の魚の釣上を請求すると、腹立たしげな目付をされても、そこに何があるのかも氣付かなかつた。

十月の末になつた。ある夜だつた。晝間の働きに疲れきつた自分としては珍らしく夜中に目を覺ました。自分は用を足すべく室を出て、調理場横の食堂を通り抜け様とした。するとその隅にしゃがんだ二人の人影があるのに氣が付いた。自分は、はてな、此の夜中に誰が何の様に來たのだらうと、うす暗い電氣の灯で瞳をこらした。處がそれは思い掛け無く船長のMと女妾の「いるか」の二人だつた。二人は、自分がそこに立つて居た事を更に氣付かなかつた。

自分はいぶかつて、自分の方に向つてしゃがんでゐる

「いるか」の足下を見て驚いた。確かに、彼の足下のタホルにぐるまつたものは、晝間からそこに置かれてある、二匹の中の一匹の海豚だつた。此處に於て自分は、初めて「いるか」が海豚（イルカ）に試み様とする事がハツキリと呑み込めた。本名Sの「いるか」は、今こそ彼の本性を現はして、本物の

海豚を今彼は、一人の異性として扱つてゐるのだ。海豚の一部分が女性に通じるのかどうかは自分は知らない。只海豚が温血で有る事実は事實だ。船長は「いるか」の背後に立つてニヤ／＼とした笑みさへ浮かべ、やがてたばこに火を付けた。數日を過ぎて、例の十一月三日の明治節が來た。その夜は船の中で宴會が開かれた。自分は命令で女に紛裝した。彼等は、自分が白粉をつけ、口紅をさした顔立ちに、手を打つて喜こび「いるか」とは又異つた感じの美人だと満足した。自分は彼等の望むまゝに、いつも化粧した顔で自分の仕事に就いてゐた。

併し自分の決心は既に定つてゐた。――下船脱走するのだ。先夜の事を見た自分は、つく／＼と自分の居る世界で無いと考へた。

やがて十一月二十日頃、船は函館の港に入つた。既に約束の期限は過ぎてゐるのに一人も下船は許されない。只、働き過ぎに成つてゐる者丈に、それ／＼金丈は渡された。自分も僅か乍らその一人だつた。併し離船する事は承知されない。

謹賀新年

日頃ノ御愛顧ヲ謝シ
併セテ移轉謹告申上ケマス
昭和二十四年一月一日

長生堂藥局

藥劑師 岡部卓司
福島縣小名濱町上町一七
電話 三七〇番

謹賀新年

日頃ノ御愛顧ヲ謝シマス
昭和二十四年元旦

ダールマ藥局

藥劑師 阿部正男
福島縣小名濱町本町二四
電話 二二二番

夜が来た。船に近付いた小舟から四五人の私娼が上つて来た。酒も肉も、その小舟から本船に移された。自分はその運搬係を勤め乍ら、その小舟に移る機会をねらつてゐた。小舟が函館港の岸壁に着いた時に、突然小舟の中から、ひらりと陸に飛び上つた十八九の少年があつたが、それが自分である事は今更申上る必要も無いと思ふ。函館のあるカフェエのソックを一ヶ月程働いて、旅費を作り、やがて内地向けの連絡船の客に成つた。自分が頭に浮べたのは、懐しき父、戀しき母、可愛い弟や妹だつたが會津に残した愛犬デヨンも、忘れられない仲間であらう。デヨンは會津で望まゝにその家にその儘居たが、可愛いそうにそれから二年程で死んでしまつた。こんな世の中に成つては、あの地獄船に乗る事は兎も角、今思へば、懐しくもあるカムチャツカのあの雪の山々も、再び見える事も無いであらう。

「完」

俳句

近藤正雄

寒月や夜警の子等の聲細し
水しわざする花街女の背に冬日かな
毛糸玉どこ迄追つて子猫かな

短歌

近藤正雄

正論に屈服せし吾にはあれど尙すてがたきこの反感は

(小我)

思いあぐみ空のまゝに目つむれば時計の音は眠りをさそふ

大いなる理想は持たぬ吾なれど折ふし辭事をひきて讀書す

有神論を否定しつゝも父病めばひたすら神を念する吾は

電鈴とタイプの音のその中にふとしも聞きし雨だれのをと

冬枯れの花苑に麥のおのゝきて一並びあり二並びあり

掌のまめを数へて今日一日清らかに生きたり

(事務屋百姓となりて)

空の青さと陽の光りを更に感じ乍ら野良畜にかへる

灯の隅に手つき幼く金數ふ母の御髪に白きふえきて

先に筆者、常磐通信創刊紙上に「ペンであぐ漫画」として町會議員列傳を記載した事は、御存知の會員諸兄も多いと思ふ。第一に金澤勉氏を書き、第二に鈴木治作氏を筆にしたものであつた。同文の發刊後の評判に對しては、同紙社員諸君も好評なりと是を喜び、又筆者の耳に入る程度のものも確かに好評でもあつた。然し、筆者は初め本誌には列傳を載せる意志を持たなかつた。處が列傳を掲載せぬと知つた同志諸君及知友の會員諸氏から「漫筆町議列傳」を載せよの聲しきりで、そこに筆者と若干の討論さへあつた。筆者の前の列傳を知るが故に入會して呉れた人もあるのだと云ふ。此處に於て筆者も意をひるがへして、再び本誌にも列傳の筆を執る事とした。此處にお断はりしたい事は、此の文は筆者が、自分の耳に入つた世論から採り入れたものと、それに自分の意見を加へたものをもつて稿とするもので、決して改めて第三者の意見を質して筆を執るものではない事である。どんな人でも世論、賛否兩論は必然で、只筆者が筆にした人々に對して、その「賛」の取入れたが多かつたり少なかつたりする場合が必ずしも無しと云へない。會員諸氏もその点を諒されて、此の文の裏も亦、味はつて戴き度い共思ふ。筆者には決して人の悪口を書こうの、その人を中傷しようのとの意見は更に無い。故に列傳中に成つた町議諸氏は此の漫筆によつて、むしろ名が賣れた位の氣持ちで笑つて讀み下す寛容さを持つて戴きたいものである。終戦後は小名濱にも人多く、事實、町議の名一つ知らない人も少くないのである。兎に角卒直に云つて、金を貰つて廣告的に書く人物批評でもない限り、先づ撤頭撤尾賞めちぎれる様な、人格並びに功績を共に兼ね揃へた人物など、そうざらにあるものではない。筆者は廣告宣傳には筆を執らない。只會員諸兄は、筆者が過する處なく、又私心も持たずに、執筆する事文を是非御承知願ひ度。

町議列傳前書

漫筆小名濱町議列傳 (二)

あづま よしまさ

お筆者様の町議と云えば、人が「齒、はあ」と頷づく、鈴

木正氏。お砂糖の配給を心から喜んで、町民を代表して感謝の辭を述べて呉れたのも此の人。さて何から語らうばやと筆者が腕こまねく時、思いがけなや、フトあたまたにひらめく八木節の歌聲。

「ハア、アアさて一座の皆様方よ。又も出ました字で書く漫画、何を書いてもあきれるまいぞ、こゝは東北小名濱港

よ、銀のうろこの飛散る濱にや、岡に黄金の花咲く通り、花に浮かれたわけではないが、鈴木正と云ふさむらいは、今日もあすもと政界びたり——、ビー／＼ビーヒヤラリ、ビーヒヤラリーのビーヒヤラリ

「ハア、アア今日もあすもと政界びたり、見るに見兼ねた女房殿は、是さ我つま正の君よ、わたしや不安で云うのじやないが、たまにや家にも居て見えてくれ、虫歯痛くて来て居る患者、今日もきのうも無駄足ばかり、入れておくれよサンブラ入齒、ビー／＼ビーヒヤラリ、ビーヒヤラリーのビーヒヤラリ」

「ハア、アア入れておくれよサンブラ入齒、これはあきれた女房どもよ、虫歯治療も家業ぢやあるが、それに山越す沼地の治療、あれやこれやえ資本の入齒、付いた財力度胸のよさは、町の會でも三羽の鳥、縣議衆議に色氣は持たぬ、子供なければ政治が子供、それぢやからとて女房殿よ、お前愛さぬわけではないが、名前正は伊達には持たぬ——ビービービーヒヤラリ、ビーヒヤラリーのビーヒヤラリ——」

小名濱町會は、此の人あたりを以つて一流の町議とする。事業、敢て謙遜なさるには當らない。自身の爲にも亦町の爲にも大いに結構なことだ。本年五十一才、竹を割つた様な氣性の人とか。それ丈につき従う人も多いと聞く。併し、如何なる人物も、長短必ず是を合せ持つ、同氏に傲慢、不遜他に譲らぬの一面有りとして、是を惜しむ人も亦多い。眞否は知らず只直情徑行型の人兎角此のくせを多く持つ。同氏の周

圍も宜しく短には盲従の愚さをなさず、時には氏の猛省も是を促し、鈴木正氏をして町會に重きをなさしめられ度い。只此の人から齒の治療を受ける時、痛い云ふと叱られそんな氣がして、筆者未だ齒痛にもその門をたゝかず、故に曾て同氏に對面の機を持たない。併し鈴木正氏に對しては筆者未だ筆を以つて紙上にまみへる機会があると思ふ。

佐藤貞吾氏の事ども。ある小母さん語つて曰く、「あゝアノ佐藤の貞吾ちゃん御座いますか、アノ子位おとなしい子は御座いませんよ。本當に聞くと涙、語るも涙、思ひ出すのも、くしやみの種と申しますのは、アノ子の事を申すので御座いませうよ。妾達夫婦でしぢう賞めてゐるんで御座いますよ。家えもねえ遊びに来ていろ／＼と用事もしてくるので御座います。お客様が見えまして、タバコと云えばみかんを差上げ、みかんと云えば雑誌を差上げる様な具合で、それは／＼、まめ／＼しく働いてくれています、お手な店員を雇うより重寶で御座いますですよ。それでゐて、おとなしいのなんのつてそんな位ですから、町會學校へ参りまして、只だまつてデット座つてゐる丈で、他の生徒がヤレ港灣問題だ、阜頭の問題だ、飯塚先生の出題はむづかしいなどと、騒ぎ散らして居りまして、アノ子はばかりは、少しも一語に騒ぐなんて事を致しませんで、デット靜かに聞いてゐる丈なんで御座いますよ。それでゐて、アレでしんは中々しつかりしてゐるんで御

座いましてね、どつちえ、ころんでも損をしない丈の心構へ
丈はチャント出来てゐるんで、御座いますよ。エ、／＼もう町
會學校なんでものは、アレでいゝんで御座いますよ。騒いだ
り喚めいたりして憎まれても損で御座いますからね。本當に
貞吾ちゃんの様なおとなしい子供ばかりでしたから、町會學
校も靜かに圓滿にゆくの御座いますえうがねえ、物事つて、
本當にうまくゆかないもので御座いますよ」

「雄辯は銀、沈黙は金」あるいは「池水の如く黙する人は底
深し」等の金言もあるが、議員の場合は、是を實踐してして
貰いたくない。殆どの議員がそれこそ選舉違反紙一重の境を
彷徨する苦勞の下に當選し、誰しもその利那は大いに感激
し感謝をしたものに違いない。それがすつかり安心されて、
だんまり議員に陥ち入つて、只大きい顔をする事丈が残つた
のでは、それでは民衆が助からない。國會の様に大きな黨派
黨別に別れてゐて、一ツの提案を試み様とするにも澤山の議
員の賛同を必要とする様な機構とは、町會はその性質を自ら
異にする。又民衆にとつて、一番痛切に且、身近に感づるの
が町政であり、市政である筈だ。前述の言葉が凡て佐藤貞吾
氏に當てはまると云ふのではないが、當町會も尚、先が永い
同氏も、確か五十を出た筈。人生圓熟の期にも既に達してゐ
る。町議としての同氏に期待する人も多いと思ふ。筆者もそ
の健闘を切に希つて止まない一人である。

(三三、一一、五、記)

—詩—

落葉

華星

緑の景色
いまははかなし
秋立ちて
装へる紅葉さへ
いとあへなく
あわれ地に落つ
朝には
昇る太陽に
霜おもく
踏みしめど
更に音なし
夕べには
月光さむき木枯に
こゝかしこさまよいて
憩ふべき
定めをたし
げに汝は
のぞみぞなく
あじきなきを幾月
如何に涯るや

校舎倒潰問題に寄す

東 義 將

去る十一月十九日の風雨に目下建造中の小名濱女學校（新
制中學）の新校舎が倒潰した。是は實に町民の關心の大なる
問題である筈だ。もし深い關心を拂はたい人があつたとした
らば、此の際此の記事から改めて大きな關心を持つて戴き度
い。自分はまるで睡つてゐる子供迄、ゆり起す様な言葉を吐
くが、それが本當だと信じてゐる。當夜あの風で町うちにい
くらかも散見出来たバラツクの建物、あるいは、建造中の建物
などが、貧棒ゆるぎもしたかつたのに、事もあらうに校舎と
して建築中の建物倒潰するとは何事だ。尤もバラツクも微
動だにしないのも不思議は無いのだ。何しろ當夜の風は最大
風速13.8mと聞いてゐる。此の程度の風なら小名濱には、毎
年處か、季節になれば月の中に二回や三回は吹きまくる事は
誰でも知つてゐる事である。又此の程度の風では建物などに
何の被害のあるべきものでもない。現にアノ日の四五日目に
も、15m位の風が吹いたのである。尤も當夜は利那的には、
19.8mが吹いたそうだが、斷はつて置くが、利那的とは無論
「バツ」と短い時間を吹いた事を云うのである。元來、風害

に依る建物の倒潰など云うものは、いくら強い風が吹いた
にしても、それがほんの短い時間である限り、そう／＼簡單
に倒潰するものでは決して無い。無論、ものにも寄るが、建
造中のものなどは、當然保強が施されぬたものに相違ない。
經過的に云つて、強い風が吹き續くか、あるいは斷續的に襲
うかして、その建物が徐ろに、ゆすぶりゆすぶられて、しか
る後に潰れたりするのが實際である。こんな事は一寸建築に
心得のある者なら誰でも知つてゐる常識だ。

御承知の通り小名濱には、最大風速26.8mと云う風が吹きま
くつた事もある。どうも建造中にしろ13.8m位の風で吹き飛
ばされる様な建物では、完成しても26.8mあるいは29.5mと云つ
た様な風には、文句なしに倒潰するのではあるまいかと案じ
られる。第一、土台の柵が抜けてゐなかつたとの話だが、此
の事文でも、聞くに慄然とする問題だ。完成時期は既に過
ぎてはゐる由だが、此の調子ならばと見てゐたのに誠に残念
なと云い度い處だが、そんな危険な建物は早く潰れて呉れて
結構だつたと申上る。迷惑するのは町民ばかりだが、むしろ
大きな事故が起きてからでは間に合はない。現に昭和九年と
記憶してゐるが、大阪の室戸颱風による風水害では、小學校
が倒潰して、多數の學童と、女教員が壓死した大きな事故さ
へあつたのだ。併し自分は此處で、工事の不正とか、あるいは
當局の怠慢等の意味を追究してゐるものではない。これは決してない。今
更云う迄もないが、校舎など云ふものは、大切（だいぢ）

の中の又大切の建物であるから、どうか擔任者がそれ〴〵に深い認識を持つて、當局は嚴然且熱誠なる監督を以つて臨まれ、又請負者も工事の重大性を一層把握し、誠實以つて工事に當る事を町民として切に希うものである。併し私見を述べれば當然當局は、右の事件に就いては、深い究明をされたものと思ふが、もしそこに少しでも釋然としない様な問題を残す様ならば、此の際請負者を新たにすべきが本當だと考へる又、町民諸氏も、右の問題に關しては深い關心の下に、目を見開いて、嚴に成り行きを重視すべきが至當であらう。

(二三、二一、二八)

謹賀新年

昭和二十四年元旦

小名濱鐵工組合

事務所 小名濱町境町
林鐵工所内
電話(小名濱)三二番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

木材業 製材業 薪炭業
瀧澤松儀

福島縣小名濱町竹町九十三
電話(小名濱)一六一番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

黒澤病院
黒澤廣

福島縣小名濱町本町一八
電話(小名濱)四五番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

營業課
設計製造一般
機械組立二据付
汽罐及配管製作据付
橋梁鐵骨製作組立
製罐及熔接一般
土木建築一般
塗裝工事一般

株式會社

金子建鐵工業所

取締役社長 金子磯五郎
專務取締役 齋藤朝吉

本社 福島縣石城郡小名濱町隼人町一〇七ノ一
電話(小名濱)二五三番
出張所 藤澤市片瀬町二九三二
電話(片瀬)三二一
出張所 横濱市井土ヶ谷中町一〇一番地
工場 横濱市西區岡野町二四番地
工場 福島縣石城郡小名濱町隼人一〇七ノ一

うら悲しげなその返事

(八)

何だ、かんだと話込む

聞くも哀れのその話

婚家の母と仲悪く

便る夫に、女あり

子供無ければ、別れ来て

家を出たのが五日前

何の氣も無く來た植田

(九)

「聞くだに、涙のお身の上

男、拙者に涙あり

他國に嫁入る妹が

年頃貴方と同じ様

他人事とは思へません

力、貸したく存じます

何か、植田で食べませう」

(十)

みより旅館はキレイなり

廊下傳いに奥の部屋

丹前姿に着換へたら

宿の女中が罷り出て

「奥様、お風呂は如何です」

ウフ、夫婦の出来上り

彼女、返事も恥かしそう

(十一)

湯から上つて彼女待つ

枕二ツは夜具の上

宿へ拂つた九百圓

残るお金は千二百

竹久千恵子が抱けるなら

こんな程度は安いもの

待てよ、あしたは芋配給

(十二)

鏡の前のその女

向けたお尻が愛らしい

ユイツ、配給なんか忘れろい

彼女振り向き、ニンマリと

「あんまり見つめちや嫌だわよ」

「あんたは、本當にキレイだなア」

「アラ、お上手な、貴男こそ」

(十三)

寢床の中で云ふ事は

「僕に好いトコ有るかしら」

「魅力感じるタイプだわ」

「口がうまいな大丈夫かい」

二二

「姜、貴男が見えた時

チャンと横目で見てたのよ」

「なんだ、そうかい、するい奴」

(十四)

「アラ、くすぐちやいやよ、

ねエ、見捨てずに頂戴ね

捨てれば姜、恨むわよ」

「何で見捨てて成るものか

君こそ、本當に大丈夫かい」

「信じられないの悲しいわ、

ねえ、もつと抱きしめて——」

(十五)

フト目を覺ませば既に朝

彼女の姿、見えぬなり

そのまゝ、待つた三十分

ウフ、廊下に足の音

睡つたフリに、いびき迄

「もし旦那様八時です」

彼女、ならない老女中

(十五)

朝の五時過ぎ出たと云ふ

ゆべの話と異つてる

乙姫様と別れ來た

浦島太郎の心境で

玉手箱にはあらね共

我、紙入れを開き見る

アラ、中には二百圓

(十七)

お江戸下りのパン／＼か

チャンと千圓差引きぬ

でも優しげなあの瞳

アノまなざしは嘘でなし

待てど暮せど來ぬ人を

宵待草は枯れにけり

「竹久千恵子よ何處へゆく」

(十八)

みんな盗(と)らぬは優しげな

この心根のいちらしさ

何かで金要るのだから

こうと、事情を話すなら

ボンと千圓投げ出して

男の氣持ちを見せたもの

情(つれ)ない仕打ちあんまりな

(十九)

小名濱町で三日過ぎ

休の一部に異狀あり

ハテ、此の頃に覺えなし

待てよ、待て／＼思ひ出す

植田の町のアノ一夜

テツキリ、あれに異いなし

竹久千恵子の置きやけ

(二十)

芋の配給取りそこね

芋を腐らす身の不徳

黒澤先生の六・六が

終つてたつた二週間

又、先生からお目玉か

又暫くの醫者通い

男心を誰が知る！

【詩】

師走

近藤正雄

海のほとり

砂のほとり

君に言繼ぐ言の葉を

ふとも忘れて——

省りみれば

師走の空に

晝の月ほのかに浮けり

【俳句】

秋雜詠

小野正雄

アリランの歌あやし秋雨しきり

秋枯れのあぜつき果て、燈ひとつ

せゝらぎにこの身も消えよ秋の温泉

炭焼きの煙をめぐるたか一羽

秋日和乳臭き布圍ひろげたり

ポータブルの怪異
東義將

(一)

此のインフレに、たけのこ生活も底をついて、夫の衣類は元より、有るか無しの私のもの、果は可愛い子供のもの迄賣り拂つて、生活の足しにして居ります私共は、只一ツ、此の眞新しいポータブルが未だに賣り拂はれずに、こうして家にあります事は、古風な云ひ方で御座います、是には、實に深いわけがあるので御座います。それは私の、たつた一人の妹の形見である事には違ひ御座いませんが、決して、只それ丈の事では無いので御座います。

おそらく、此のお話を致ししても、誰方にも信じては頂けない事で御座います。此の事は私として私の夫の信吉と、それに私共の一つぶだねの今年五ツになります清子が、あの時の出来事を果して此の先何頃迄記憶してゐるかは存じませんが、やはり此の世で、此の事を知つてゐる一人なので

御座います。

たつた一人、此のお話を信じた人に私の母が御座いました。母は私からその話を聞き取りまして、
「その位の事はあつてせうよ。アノ子が、アレ程可愛いがつてゐた蓄音器で、きつとアノ子の魂がのり移つてゐるに異ひありませんよ」

母はその時、小さな佛壇に改めてお燈を上げて、その前に両手を合はせ、デツと亡き牙子の冥福を祈つてゐる様子で御座いました。併しその母さへも先月、五十三と云ふ、未だ年と云ふのでは御座いせんのに、とう／＼亡くなつてしまひました。

話の順序から申し上げますと、私共は疎開で此の土地に居付いたものでは無いので御座います。主人は元、横濱である軍需工業の會社に勤めて居りましたが、年の割合には良い位置に御座いました。處が戦争が激烈になりましたから、工場

の方の資材難から、夫の會社も段々經營が困難になつて参りました。そこへ折り悪しく、社長さんが出張先で突然亡くなられたり致しまして、何しろ、殆ど個人經營の様な内容の會社で御座いましたので、とう／＼會社も解散致してしまひました。夫も當座は自分の方針にも困つて居りましたが、只アノ當時三十を出たばかりと云ふ年にも、不思議と召集もなければ、會社を止めた後にも微備にもかゝりませんでした事が私共には、せめてもの事で御座いました。そうこう致して居ります中に、五月二十九日に横濱にも大きな空襲が御座いまして、私共も罹災致してしまひました。何しろ主人も私も、都會生れの都會育ちで、地方に身寄りや知人を持たないもので御座いましたので、氣にかけ乍ら、とう／＼衣類一品疎開も致さずに居りました。そんなわけで、罹災以來、私共はそれこそ本當に命からがらの一夜乞食になつてしまひました。

夫は、人様にすゝめられて、他に方法もないまゝに、魚のブローカーと申した處で、例のガンガン部隊でございますが、そんな事から此の土地にも度々参る様になりましたのがきつかけで、此の町なら此の食料難時代にも、魚もあれば野菜もあると云つたわけで、此の土地に此の家を探しまして、終戦一年目位に親子三人が移つて参つた様次第でございます。お隣りが家主さんで——お隣と申しても町外れの事でして私共と、たつた二軒きりでございまして、近くには家も無く廻りは殆ど畠で、海岸に沿つた町ではございますが、私共の

四邊は余程南の風のある日でもなければ、波の音も聞えない様な静かな、いえ静か過ぎる様な所でございます。家主さんのお宅はお百姓でございしますが、そのお宅とも十四五間は離れて居りまして、夜など、特に主人が東京に商賣に参りました留守などには、本當に淋しくて願ひないうちは一寸、寝付かれない様な事もございました。

でも家主さんが本當に親切な方でして、夫が此處を庄居にとお願ひした時も「こんなポロ納家を一体どうするんだね」と、それでも笑つて「どうせ使ふ氣持も無いのだから」と快よく貸して下さつたのだそうでございます。それを夫が、六疊と二疊の二部屋に改造致しまして、——改造と申しましたも、僅かな材料で夫が自分一人で致しました事で、見る影も無いあばら屋でございますが、それでも、ポロ疊も入れまして、どうやら雨霧だけはしのがして戴いて居ります。

家主さんにも前には僅か乍ら「お家賃に」とお届けした事もございましたが、

「ナニ、そんなものが入るものかね、畠の番人をして貰へる丈で澤山だ」

と、却つて、いつもお宅で出来た季節のものなどを逆、に戴いたりしてゐる位でございます。

さて、此のポータブルが私の家にございます事は、前にも申しました様に、妹の形見ではございますが、元を申せば夫が私の妹に買つて與へたものでございます。元來私の

妹と申しますのは、それは／＼不停せな娘でございました。牙子と申しましたが、昨年の秋、亡くなりました時が十七でございました、十三の時に一寸した事から、高い所から足を踏み外しまして、とう／＼歩行も出来ぬ跛と成つてしまひました。そんな事から、小學校も六年の途中で止めてしまひまして、可哀そうに、その後は家でいざりの様な生活を致して居りました。私の口から申すのもなんでございますが、人並外れて器量の良い子で、その上そうした不具ではございしたが、本當に氣質の良い子でございました。それ丈にその哀れさいぢらしさは又一入でございました。不具に成つた事が原因致しましてか、又は運動不足のせいからでございませうか、牙子とはとう／＼胸を悪く致しまして、十五の春頃からず／＼と寝付いてしまつて居りました。今年、二十八に成ります私と牙子との間に、生きてゐれば二十五に成ります弟がございませうが、二十の年に在學中に應召致しまして、終戦當時が南方の管でございましたが、今以つて生死が不明でございませう。無論私も亦亡くなつた母も、既に弟は世に亡ひものとあきらめてはゐたものでございます。父は私が十四の時にみまかりまして、その後は母子四人暮らしの、本當に母にばかり苦勞をかけてゐた生活でございました。

私が主人と縁がございまして、結婚致しましたのは、私が二十二の春でございましたが、夫も早くに兩親を失ひました人で、私以上に身寄りの少い人でございました。それだけに

私にも亦私の亡くなつた母にも、それに私が縁付くと間もなく、そんなフーに成つてしまつた妹にも、それは／＼いつも優しくいたはつて呉れて居りました。

私共が生きてゐる爲に、福島縣の此の漁港の町に移つて参りましてからも、夫は東京に出たついでを度々横濱迄参つて、母や妹を訪ねて、二人を慰めて呉れる事を忘れませんでした。そんなフーで御座いましたから、妹はそれは／＼夫を眞の兄の様に慕ひまして、義兄が訪ねる事をどんなに楽しみにし、又どんなに心待ちにしてゐたか知れないのでございます。

母は先月ボツクリとは亡くなりましたが、前には本當に丈夫な人でして終戦後何をしてでも働くとし、又事實働いた事も有つたのでございました。併し何分病人を抱へてでは思ふに委せず、その生活費も又お醫者様のお拂ひも、殆ど夫が乏しい中から割いて仕送りしてゐたのでございました。牙子が亡くなりました一ヶ月程前でございました。歸宅した夫から牙子の容体が大部悪いと聞かされて、その三日目位に私も夫と共に清子を連れて横濱に妹を訪ねたものでございました。勿論妹の喜び方はそれは／＼大變なものでございましたが、前に参つた時は、それ程とは思ひませんでした。それが二ヶ月にも成らない今、まるで蠟燭の様に瘠せ細つてしまつた妹を見て、私がどんなに歎き悲しんだかはお察し下さいませ。母の家は横濱市の片邊りではございませうが、やはり同じ焼け出されて、アノ直後に夫が作つて與へた焼けトタ

ンのバラックで、床の低い六疊程の一部屋の破れ疊に、配給物の毛布に包まつて、聲はかすれ、目ばかり大きくなつてしまつた瘠せに瘠せた妹を見ては、私はその夜、幾度、バラックの外に立つて聲を忍んで泣いた事か知れないのでございます。その晩でございました。主人がわざと元氣をつくらつて、「牙ちゃん、何か欲しいものないかい。姉さんがお見舞に來たしるしに、何か牙ちゃんに買つて上げたいのださ。何でも欲しいものが有つたら云つて御覽」

夫は牙子にこんなフーに、改つた様子ではなしに申しました。無論こんな言葉は、今迄度々夫から出たのだそうでございます。併し妹はその度に義兄に無駄をさせ度くないと考へてでございますか、いつも「えー有難う！別になんにも」とそんな返事ばかり致しまして、只ニツコリとする位のものだけつたそうでございます。處が、その晩に限つて、「そうねーどうせお兄さんに御迷惑をおかけするんでせうけど、あたし——」

と、顔をそむけ乍らに何か申出たい様なフーで御座いました。その様子に、私も遂嬉しくなつて、傍らから、

「牙ちゃんに、欲しいものを云つて御覽なさい。なんでもいゝのよ」

元氣づいて私がそう申しますと、妹は

「あのねー、あたしあの一新しいー蓄音機が欲しいの」と細い聲に申しましたが、その儘傍の焼トタンの壁にはつて

有る外國雑誌の廣告の蓄音機の寫眞をデツと見つめてゐるの御座います。それは蓄音機のボツクスの蓋を開かれてゐる繪でございませうが、それが着色丈に、本當に美しい高級品らしいでございます。

夫は事もなげに、

「あゝ蓄音器か、お安い御用だ、よし明日買つて來るよ」

元氣良くそう申してから、妹が見入る壁の寫眞に目をつけてそして笑ひ乍ら、

「ハ、ア、サエちゃんはいつも此の繪を見てゐて蓄音器が欲しくなつたんだな、よし／＼きつと買つて來るよ、併しこんな上等なのは、今の日本には一寸無いかも知れないぞ、それは進駐軍の雑誌の廣告だね。兄さんが買つて來るのはどうせ今の日本のものだ。一寸位品が落ちてても我慢するんだね」

夫のその言葉にサエちゃんも嬉しそうに微笑んで、

「エ、こんな良いんでなくてもいゝの、只お兄さんに悪いけど新しいのが欲しいの」

「よし判つた」

(二)

翌朝外出した夫は、夕刻手に風呂敷包を下けて戻つて來ました。

「サアサエちゃん、お待ち兼ねの蓄音器だよ」

夫は自分の手で病人の傍に風呂敷包を解きましたが、中から眞新しい——本當は新品では無かつたのでせうが——奇

麗なポーターを出しました。無論進駐軍の雑誌のものと、型も式も大分異つて居りましたが、それでも、牙子が多分に満足し喜こんだかは御想像下さいませ。母などはもう目に涙でございました。夫は、

「何だ、サエちゃんこんな喜ぶなら、早く買つてやれば良かったなあ、併し蓄音器とは気が付かなかつた」と、笑つてはゐましたが、併し私は如何にこんな品でも、此

の程度の品を、今の世に手に入れるのには、おそらく夫は、今の商賣の元手の大半を手離した事が考へられて、心でソツと夫を拜ますには居られませんでした。

夫はそのポーターと一緒に、中古のレコードを十枚程買つて参りましたが、それは殆どが古い流行歌で、御存知の古賀政雄の「影を慕ひて」やら「酒は涙か」又「丘を越へて」や「サーカスの歌」それに「片瀬波」などもございましたが併しそれはろくに小學校も終らずに、外出さへも出来ずに暮して来た十七の妹にとつては、可哀そうな言葉では御座います、實に、うつてつけのもので御座いました。

勿論、早速その場でレコードは掛けられました。次々に掛けられるレコードには、清子迄が喜びまして、何處でおぼへたものですか、ダンスの真似などを致しまして、ドタ／＼して夫に叱られたり致しましたが、サエ子はむしろそうした小さい清子のはしやきかたを喜びお／＼で御座いました。そして、しぢふニコ／＼と、その瞳はまるで生き／＼とよみ返

つたようで、自分もレコードに合はせてそれ等の歌詞を思ふ様に聲も出ぬまゝに、只口びるの先に致して居りました。それ丈に、その喜びも察しられ、どんなに私達も心を明るくしたか知れないので御座います。夫は「蓄音器とは気が付かなかつた」と、その言葉をくり返して申して居りましたが、むしろそれを常人から云はれませず、自分も亦氣付かずに居た事が如何にも残念そうに御座いました。思へばサエ子はこんな境遇に、決してラデオも備へてゐない今、どんなにか蓄音器に永い事あこがれを持つてゐた事で御座いましたらう。

さて、それは兎も角と致しまして、それからが大變で御座いました。と云つて別に變つた事が起つたわけでは御座いませんでしたが、その後、来る日も／＼も、牙子が片時も云つて云ひ位に、レコードをかける事を止めないので御座います。勿論それは私の仕事では御座いましたが、併し是には私も一寸閉口致しました。尤も、夫は二晩泊つた後を福島縣の自宅に戻りましたが、私と清子は、牙子の容体が容体で御座いましたので、そんなわけで、牙子の對手役は、私で御座いました。御近所と云つてもその邊は燒跡の空地が多く、建てられた家數もまばらでは御座いましたが、それでも何しろ燒トタンのパツクから、朝から晩迄、しききり無しに鳴りつづける流行歌のメロデーは莫迦にそ／＼は過ぎるものでして實に妙なもので御座いました。その十枚程のレコードをくり返し／＼掛けて居りましたが、妹は特に「影を慕ひて」と、

「片瀬波」を愛して居りまして、その二ツを掛ける事が最も多く御座いました。それはレコードを掛ける事を止めてゐる時間も御座いましたが、そんな時は睡つてゐない限り、必ず痒せ細つた、私などは思はず目を反けずにはゐられない様な、細い青白い手を延ばして、その蓋開かれたポーターの美しく光つた金屬の部分で、その指先で撫で廻したりしてゐるので御座いました。如何にもそれは、心からそれに愛着を感じ愛撫してゐると云つた様子で御座いましたが、その時は私も只、そうしたものを與へ得た事を心に喜こんでゐただけで御座いました。そんな時間に妹は、時には私はこんな事も申しました。

「ねえお姉さん、是からは生きて行く人も大變ねーお兄さんの様な良い方が、闇屋をやらなければ生きられないなんて本當に悲しいわー早くみんなが、闇なんかしなくても済む世の中が来ないものかしら——」

それは妹が、夫の仕事の良し惡しを申したわけではございませんが、日頃から私も夫も、決して自分達の生き方を良い事とは思つては居りませんでしたし、それ處か、夫は自分でも常に「こんな仕事は満足の人間のやる仕事ではない實に恥すべき事だ」と申してゐた位でございました。私に致しましても、夫が商賣に出かけました時は、夫が歸宅致します迄は心配しつづけるその境遇を思へば、早く夫に闇屋などを止めさせ度いと思ふのは、妹と同じ心でございましたが、その時

は遂心を暗くして返す言葉もございませんでした。妹は又、こんな事も申したのでございます。

「ねえお姉さん、妾が死んだら、此の蓄音機、お姉さんの所へ持つて行つて頂戴ね。——そして、お兄さんやお姉さんが此の蓄音機を掛ける時は、何頃も妾も一諸に聞いてゐると思つて頂戴」

「まあそんな事を」

と、私は口には申しましたが、併し今更口先きの氣休めも云へない今、やがてそんな日が、それも、直に訪れるのでは有るまいかとソツと妹に氣付かれないう様に、目頭の涙を指先き拭つたもので御座いました。

處がポーターを買つて参つた日から二十幾日、春だと云ふのに、とう／＼妹は、丁度その前日に來てゐた夫を加へた私達四人に見まもられながら、淋しく此の世を去つて行きました。

母の望むまゝに、やはり母丈はその家に残して、今は妹の片身で有るポーターを下げて、福島縣の住居に歸つた私共にも、其の後も益々きびしい生活苦の波はひし／＼と打ち寄せて参りました。それこそ苦難の日の連続で御座いました。

警察の制度が變つて、五六人であつた此の町のお巡りさんの數も一度に三十人近くに増員されました。町に起つた兇惡の犯罪などは未解決で有つても、毎日此の町の私鐵の驛から捕つて行く闇屋の數丈は大したもので御座いました。東京向

けのお米のかつき屋なども捕りましたが、何と云つても、土地柄から、お魚の闇屋ガシ／＼部隊の捕まるのが一番で御座いました。御多分に漏れず、夫も僅かな日数の間に二度も捕まりまして、すつかりかつぎ屋にさへ自信を失くし、なれにしみ／＼と夫婦で考へる處も御座いまして、元も子も失くしてしまつたのをキツカケに、夫は「もう二度と闇屋なんかやらない」とキツバリとそんな仕事も止めてしまひました。其後は暫らく出人夫などを致して居りましたが、併し大した賃金も得られず、とうてい親子が、生きてゆく丈を満たす様な収入も御座いませず、生活は段々苦しくなるばかりで御座いました。

闇屋時代には苦しい乍らも何かボツ／＼と買ひ集めて居りましたが、今度は逆に「目ぼしいものから」と申しても、私の家での事で大したものも御座いせんでしたが、次々と賣り拂つて参る始末で御座いました。一々並べ立てるのもお恥かしい様な、僅かな衣類や道具では御座いましたが、それがどうやら私共の生活には事足りて居りましたのに、それが又着のみ着のまゝの境遇に戻つてしまつたので御座います。夏に入るのに蚊帳さへも手離そうかと相談した事さへ御座いましたが何分、やぶ蚊の多い所で御座いまして、さすがに自分達は兎も角、可愛い、清子の事を思ひまして、それ丈は思ひ止まつたので御座います。

そんなフーで御座いますもの、既に何の要もなく無つた此

のボーテーブルに致しましても、私も幾度賣ろうかと考へたか知れないので御座いました。併しやはり清子の片身清子があれ程愛着を持つてゐたもので有る事を思ひますと、一寸それ出来兼ねて居りましたし、それに夫も同じ様に考へて呉れましたものか、ついぞ、ボーテーブルをそんな話に乗せた事も御座いせんでした。此のボーテーブルも持つて参りました當座、五六度掛けて清子を喜ばせた位のものでして、その後、五度掛けてしまひ、手も觸れた事もなくつたので御座います。何故かと申しますと、是を掛けますと、やはり清子の死の前後の淋しかつた模様などを、嫌でも思ひ起こされましたし、それに晝間は、相當人通りもある近くの街道を控へた此のあたりから流れ出すのは、歌謡曲などと云ふものは、ラデオと異ひまして、蓄音機では余りにそぐはな過ぎて、むしろ氣恥かしい様な感じさへ致すもので御座います。

清子の片身となつたボーテーブルに對しては、私共はそんなフーで御座いましたが、併しとう／＼是も手離さなければならぬ時が参つてしまひました。その事情につきましては、今更くだ／＼しくも申し上げませんが、實は如何に私共が窮迫したとは云へ、本當にお恥かしいお話で御座いますが、つまりそれを賣つて、僅かながら資金を作つて、又夫が闇屋をはぢめ様と考へたので御座います。此の地方の近くから出る葉煙草を東京方面にさばいて、それを反復して少し余裕を作ろうと計畫したので御座いました。前にも申した様に夫は今迄

ボーテーブルを賣るなどと云ふ事は、只の一度も口にしたりはして御座いせんでしたが、その時は私が勧めた事で御座いました。夫は別に深くは拘はつては居りませんでした。

只、

「ぢやんに濟まないなあ」

と、しみ／＼とした口調で申して居りました。それは私としても同じ思ひで御座いましたが、それも今更どうにもならない私共だつたので御座います。此のボーテーブルにつきましては、前に古物商の人が見えた時に「是ならば、いくら／＼に貰へるが」などと、勝手にお値段を付けてゐた事が御座いましたが、その時は、私共がそれを聞かぬ振りにゐりましたのでそのまゝになつて居りましたが、夫は早速その古物商のお宅に上りました。お話はすぐまとまつた様子で御座いました。

(三)

さて、明日は夫が町の古物商のお宅にボーテーブルを届けてお代を頂いて来る事に定つた夜で御座いました。夫は夕刻人夫仕事から戻りましてから、久々に棚からボーテーブルを下しまして、入口の二疊でその埃などを拭き取つて居りました。そんな事から自然その夜は、夫が、清子の爲にボーテーブルを買つて来た時の事などが、夫婦の話題になりましたが、私が床に就いたのは十時頃で御座いましたらうか。電氣を消した蚊帳の中で、九月も末になつた昨今、そろ／＼夜分は涼風も

立ちはじめましたのに、妙に寝苦しく、遂に妹や弟の事などを思ひ浮べて仲々に寝付かれずに居りました。破れ壁一ツ向ふには、降る様な秋の虫の聲です。時を報じる時計は無くとも、もう十二時に近い事は考へられました。それでも何頃か、私もうと／＼と夢地に入つてゐた様に覺えました。

どの位経ちましたか、私はフト、何かの音で目を覺えました。私は「チャッ？」と今もの音に耳を濟しました。が、四邊りはしーんとして何の音も聞えないので御座います。確かに、丁度柱時計か、蓄音器の巻き過ぎの爲にゼンマイが切れでもした様な、アノ鋼鐵の弾ねた様な音に異ひなかつたので御座いました。それに妙な事には、尤もその時は別に不思議にも思はなかつたので御座いますが、先程迄の、アレ程の虫の聲が、ビタリとして少しも聞えず、四邊りはしーんと計は無し、蓄音器にしても、巻いてなぞなかつた筈なのに、「夢だつたのかしら」と見えぬ暗がりの蚊帳の天井をデツと見つめて居りました。

するとどうでせう。突然私の耳にレコードの歌謡曲でも有る様な、何かの曲が低くゆるやかに聞えはじめたので御座います。私はハツとして耳を澄ました。低い音と云つても、それは決して遠くで掛けてゐるものではなく、遠く處か近くの、しかもそれは、確かに二疊に置いた筈のあのボーテーブルの邊りから、いそ／＼そのボーテーブルが鳴つてゐるもの

に相違無いので御座います。私は急に、それこそ總身に水を浴びせかけられた様にゾッととして、全身の毛穴が立つのを覚えて皮膚の毛が肌着に觸れる様な感じさへ致しました。凡てはほんの數秒の事で、いへ／＼それで終つたわけでは無いので御座います。終りまするか、確かに低いしやがれた様な歌聲さへも聞えてゐるのです。聲をあけ度くとも咽喉はつまつてしまひ、手を延ばして夫をゆり起し度くも、体は怖ろしさに硬直してしまひました。併し私はその間にも、自分は未だ何か夢を見てゐるのではあるまいかとさへ考へも致しました。併しレコードの音は少しも止まないで御座います。それでもやつとの思ひで、ふるふる手を延ばして清子を中にして睡つてゐる夫をゆり起しました。夫はやつと目覺めた様子で、

「何だい……」

と、いぶかしそうに答へましたが、私は、

「貴男、あ、あ、あの音……」

と、云つた丈で、清子を抱きすくめてガタ／＼とふるへて居りました。夫は暫らくデツと何かに耳を傾むけてゐる様子で御座いましたが、やがて

「蓄音器が鳴つてゐるんだなあ……」

と、さもなくばにつぶやく様に申すのです。私はその言葉と一緒に、思はづ、

「こはいッ……」

と、一聲、清子ぐるみ夫の体にしがみつきました。私のその一聲は「キヤッ」と、云ふ聲を、只言葉にした丈のもの、我々一層恐怖を募せました。

やはり私の夢でも無く錯覺でもなしに、現實に、夫の耳にも聞えてゐるのです。夫もさすがにドキッとした様子で御座いましたが、併しデツとその音に耳を澄ましてゐるフーで御座いました。私の今の叫びで、清子迄が目覺して、

「お母ちゃん、アレなに、蓄音器が鳴つてゐるの」

子供心にも、此の深夜に鳴るレコードには、不思議とも恐ろしいとも思つたもので御座いませう。おびえた様に申すので御座いました。やはり清子にさへチャンと聞えてゐるのは御座いせんか。清子の言葉で私は一層怖ろしさに、

「だまつてゐるの……」

と、低い聲で清子をたしなめて、ふるふる片手に清子を抱きすくめ、片手を夫の胸にすがらせて居りました。

やがて夫は、私の手をソツとのけて、むつくりと起き上りましたが、そのまゝ蚊帳をはねて蚊帳の外に立ちました。夫は電氣のスイッチを入れた様子で御座いましたが、何故か、就寝前に消した電氣はつかなくつたので御座います。

「ロウソクは何處だい……」

夫は、つぶやく様に申しましたが、その聲はとて、普段の夫の聲とは思へぬ、ふるふるを帯びたかすれ聲で御座いました。私も勇氣を起して起き上り、清子の手を握つたまゝで、蚊

帳の外に這ふ様に出ました。夫がその氣はいに手早く蚊帳のつり手をはづしました。その間にも蓄音器は、少しも止む事なく颯々として何か判らぬ音楽に、意味の汲み取れぬ歌詞の様なものは聞えてゐるのです。私がふるふる手に渡したロウソクは、夫が數本費したマツチで点火され、ボツと、そしてせまい部屋を照し出しました。夫は手製のロウソク立にそれを立てると、デツと立つた儘、ポータブルを見つめて居りました。夫は傍らの藥罐を取つて、冷へた湯を口移しに「コクコクツ」と二口程飲みましたが、やがて靜かにポータブルに近寄つてゆきました。私も慌てて、夫の寝巻きの帯に掴まる様にして、清子の手を握りしめた儘、ポータブルの前に立ちました。疊の上に置かれた目の前のポータブルは、相變らず鳴つてゐるので御座います。近寄つてみても、歌詞のハツキリしない事は少しも變る事は御座いせん。只その曲は、一寸「影を慕ひて」に似てゐる様にも思へましたし、又ま

るつきり異つたものゝ様にも感じられましたが、何と云つても、その時は只夢中で御座いました。その歌詞に至つては、レコードを通した人間の、それも女の歌聲には感じられますが、只それ丈の事で、實にわけの判らぬもので御座いました。いつか夫も、私もポータブルの前に座つてしまひました。夫は腕組みをして、デツとそのポータブルを見つめてゐます。ポータブルはやはり同じ様子で御座います。

やがて夫は、手を延ばして、ポータブルの蓋を開きました。

私はハツとして、無意識に夫のその手を引止め様とした位、此の場合の夫のした事は大胆な、思ひ切つた事で御座いました。處がどうでせう。蓋取られたポータブルには、レコードが乗つてゐる處か、廻轉板さへ靜止して、しかも器具はそれ／＼におさめる所へチャンとおさめて有るでは御座いせんか。それなのに、その音楽は、その歌聲は、依然としてチャンと私共に聞えてゐるのです。もう明らかに、そのポータブルの中から、いへ／＼ポータブルそのものから、音の凡てが聞えてゐるのに違ひ無いので御座います。四邊は實にシーンとして、只すき間洩る風に、ロウソクの灯がゆらひで、凡ての物や私共迄もゆら／＼として、それが作る明暗が、一層無氣味の氣持を募らせるもので御座います。

夫と私は思はず頭を見合せました。その夫の顔色、私は今迄自分の夫に、こんな顔色を見た事が御座いせん。蒼白處がよく紙の様と申しますが、全く、その通りなので御座います。併し、私とても、やはり同じ事で御座いましたらう。

併し、此の世の中に、こんな英邁げた事が御座いませうか世には、我が耳を疑ふと云ふ言葉も御座いますが、その時の私共には、それさへも出來ないので御座いました。凡ては現實なのです。目の前に續けてられてゐる怪奇の出來事なのです。私は夫の大きい體の影に座つて、そのポータブルを見つめて居りましたが、恐怖の心の中からも、是は清子の聲だと思はづには居られなかつたので御座います。清子が、いえ、

牙子の聲が、此のポータブルを通じて、私達との別離を悲しんでゐる、いえ、それ以上に牙子は、是を賣つて、又闇屋をはじめ様とした、私達の心を戒めてゐるのではありますまいか。

デツとポータブルを凝視してゐた夫は、何故か目一杯涙を浮べましたが、ホロリと一しづく、ソツとポータブルの蓋を閉じました。そして、

「牙ちゃん、かんにんしておくれ、兄さんが悪かつた。牙ちゃん、別れ様としたり（夫はこう申しました）是を賣つて、又闇屋なんかになり下ろうとしたりして、本當に兄さんが意久地がなかつたんだ。牙ちゃん、是からはきつと、石にかちりついても、眞面目に努力して生きてゆくからかんにしておくれ、考へりや、此の苦難も當り前なんだ。みんな戦争に負けた國の國民なんだ。兄さんが間違つてゐた。どうか牙ちゃん許しておくれ」

夫の言葉は、人に云ふ様に、又、つぶやいてでもゐるかの様に、それは丁度、お墓の前に、もの云ふ人の如くで御座いました。すると、どうでせう。その怪奇な音楽が、そして歌声が、段々細くうすれてゆくの御座います。まるで牙子が夫の言葉が判つた様に――

遂には全く、その聲は聞えなくなりました。

私は思はず、恐怖も忘れて、

「牙ちゃん、かんにんして！」

と、ポータブルにしがみついて、心に牙子を抱きすくめる様な思ひさへして、聲を上げて泣き崩れました。清子迄がツツと泣き聲を上げてゐたのです。電氣がバツと灯りました。

それはその場合、自然の事であつたのかは知れませんが、それは私には、牙子が愚かな私を今こそ、許して呉れた様な思ひさへ致しました。

一匹の蟋蟀がビヨン／＼と跳ねて、疊の上から土間の方へ飛んでゆきました。

夫が「ホツ」と深い溜息と共に、

「牙ちゃんも、判つて呉れたんだ」

涙の聲に、つぶやく様に申しました。すると突然、實に突然の様に、急にアレ程静かだつた外の天地に、再び降る様なかしましい迄の秋の虫の聲でした。

――（終り）――

川 柳

齋 藤 光

倒閣の後に疑獄の連座ありやがて小音に組閣成るらん
闇に明け疑獄に暮るゝ民主國「法律」一人罪を犯さず

小名濱港 所見

皇國の護持と咲きにし海のたて散りける後の防波堤かな

謹賀新年

昭和二十四年元旦

製鐵 配管 工事 一般
電氣 及 瓦斯 熔接 一般
機械 組立 及 据付 工事
設計 及 製圖 一般

清水工業所

所 長 清水 秀雄
職 長 龜 葉 道雄
副 職 長 中島 米三郎
設計主任 上坂 太刀彌
營業所 福 島 縣 石 城 郡
小名濱町宮下一〇三ノ一
電 話 四 二 四 番
工 場 福 島 縣 石 城 郡
小名濱町宮下一〇三ノ一

謹賀新年

昭和二十四年元旦

土木建築請負業

草 野 組

組 長 草 野 惠 正
職 員 一 同
事務所 福 島 縣 石 城 郡
小名濱町下町七番地
電 話 二 七 三 番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

小名濱町々會議員
福島木造船業會長
小名濱造船所

社長 藁谷寅之助

工場 福島縣小名濱町榮町一
電話 一九五番
自宅 小名濱町古湊
電話 一八七番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

東京ラセン工業株式會社
小名濱工場

工場長 村上治男
職員 一同

福島縣小名濱町船引場四三
電話 三一 番

東義將

主幹……君とその作品……

新妻渡

小名濱驛前近く、東義將氏の在りと知る人はあつても、同氏に秀れた文筆の才能のある事を知る人は稀であらう。東氏は筆を取つては實に天才的な閃きを持つ。特にその小説に至つては、實に堂々たる文學で、もし氏の小説が大雑誌に掲載を見たとしても、必ず一流作家と比肩し得る事を自分は堅く信ずるものである。自分は既に氏の各種の小説を知るが、いづれも其のテーマキャッチの鋭さ、特に長篇に於けるスケールの雄大さ、實にフランス文學を思はせるものがあり、氏の人生探究はつきる處を知らず、人生の眞理を鋭い感覚に依り深く掘り下げられて行く哲學的香氣は實に全篇に漲つて居る。又、大衆化した平易な文章は却つてその詩的描寫の効果を一層強くして居るとも云へる。例へば本誌連載の長篇小説「吹雪を衝く」にしても、自分は夜を徹して是を讀了したが、自分の他にも、全篇を徹夜し、又は六時間、七時間の一氣の讀了をなした人に、前町議福尾伊太郎氏を始め、清水工業所長清水秀雄氏あり、定西、小野東一氏あり、鈴木嘉文、小野豊、比佐永壽郎の各氏がある。此の他

にも尙多數の人がある筈である。先に常磐通信紙上に、同小説の掲載を見たのも、同紙主筆、石津氏が、同じく徹夜組の一人と成り、熱心なる懇請に依つた結果たる事は、既に同紙上の作者紹介に記載された通りである。即ちその全文をここに借用すれば「氏は現在小名濱町に居を構へてゐるが、遠く南洋、台灣、鮮滿地方に迄、土建請負業として足跡を残した人で、産は東京、青年期より現在迄人生明暗表裏味はざる處なく、同氏の小説にも氏の体験が如實に現はされてゐる。四十二とは思えない若々しい變つた風格の持主で、かくれたる文士として、一部に知られてゐたが、此の程本社との熱誠な交渉に、郷土文化の爲筆を取られる事に成つた、云々」と、實に同氏をうがち得て妙で有る。名は体を表はすと云ふが、實に同氏の氏名こそ、体を現はし性格を現はしたもので、同氏の作品の中にも、氏の性格が如實に表現されてゐる。併し自分は過日の新聞掲載に關しては、同紙が旬刊である丈に、讀者の興味を半減せぬかと案じて、當時東氏に對し、その掲載を反對したのも事實である。しかるに、幸に此の度同人雜誌「港の灯」の發刊を見て、本誌上再び同氏の小説に接するを得た事は自分ばかりか、東氏の小説を知る諸氏の快欣とする處であらう。東氏の小説の強味は、その年齢の層を廣く持つ事もその一ツで、青年男女のみか相當の年輩の人が讀んでも、おそらく興味のつきない魅力ある作品と考へる。本誌上多く東氏のものが載せられた事は、創刊號として、原

稿不足のせいもあつたが、東氏は小説以外の論評も亦、全く左右に過せず、節に屈せず、その透徹せる頭腦を以つて正確なる判断と、確固たる信念の下に堂々たる論陣を敷くものでその社會批判等は實に讀みごたへのあるものとして、必ずや讀者を満足さす事を同人として確信するものである。尙「吹雪を衝く」はその姉妹篇「飛彈の秋風」「春日莊物語」と共に、東氏の誇る春日將三、三部曲の一ツでもある。大長篇小説「飛彈の秋風」に至つては、飛彈山中の美郷F町の鑛泉旅館の美しい娘の家出によつて事件の端を發し、實に破瀾萬丈讀者を魅了し盡す事は必然で、もし又此の小説が飛彈地方の人々の知る處と成つたら、驚天動地の衝激を與へる事さへ確信が出来る。會員諸氏もやがての時期を期して待つべきものがあるいは、大雜誌に掲載になる運命を持つてゐたかも知れないのである。即ち同人小野豊氏、東氏に乞つて右の小説を携へて上京、その親類を通じて、雜誌「婦人の國」へ依頼して來たが、此の度本誌發行と同時に、東氏の原稿を必要とし、逆に返送を依頼した。しかるに日を経て返送有り、その砌り、小野氏並びに東氏に宛て、丁重なる手紙があつた。其の文に曰く「東氏の原稿を本誌出入の田村先生に被見を乞つてあつたので、速かに請求に應ぜず濟まなかつた」と。文中田村先生とは、田村泰次郎氏と解するも誤りではない。「婦人の國」は大雜誌なり。其の手を通じて時の大家の被見を乞ふ。

ふ。以つて會員諸氏も、東氏の眞價を知りたい。短篇「恐怖の十三分間」是は自分は大好きな氏の作品の一ツである。是は東氏が過日自分と平市よりの歸路、雨の夜の終車の中で東氏が數分間にして構想を締め、車中でその筋を自分に語つたもので、その夜の中に、小名濱驛の机の一隅を借りて書き上げたものである。東氏は是をコント風に書上げてゐるが、その着想は、實に面白しと云ふべきものである。以上種々と述べたが、只東氏を知り、東氏の作品を知る友人の立場から敢て此處に筆を取つた次第である。

—(完)—

正 誤

日本水素株式會社「賀正廣告中」
常務志摩氏ヲ、ソノ名英二ト有
リマスノハ、英一ノ誤リニツキ
コヽニ同氏ニオ訛ビ申上ゲ、且
ッ訂正謹告申上ゲマス。

謹 賀 新 年

昭和二十四年元旦

運輸省指定旅館



小 瀧

渡 邊 キ ヨ 子

電話(小名濱)一〇三番

年末年始の御宴會に郷土の歡樂郷鑛泉旅館「小瀧」を御利用下さい
御宴會團體御宿泊等御豫算で格安にお引受けいたします

吹雪を衝く 第一回

東 義 將

連絡船待合室

一人の驛員が待合室の正面の告示板に大きな告示の紙をはりつけた。待合室の群衆が一齊にその方に目を向ける。「青函連絡船松前丸の出航は、猛吹雪の爲め午後四時と變更されました。」

只それ丈の文句だったが、人々が一齊にガヤ／＼とさ／＼やき合ふ聲は、まるで大きな喚きの様な響きを持つた。

無理もなかつた。殆んどが今朝五時青森着の人々で、皆正午十二時出航の船を待ち、既に相當の時間も経つて、此の特に構内にある連絡船待合室に、せめて一時間後の乗船を楽しみに、デツと寒さの苦痛に堪へ乍ら待ち切つてゐる最中に、此のうらめしい告示だつたのだ。是では未だ五時間程を待たねばならない。時間と共に、次々にホームにすべり込む汽車その度に吐き出される人の數と共に、連絡船待つ客は増える

ばかりで、正午近くには先づ三千には達したろう。その殆んどが北海道、あるいは樺太への出稼ぎの人夫で、それ／＼に家族を伴つて、世帯をしまつての出稼ぎを、その荷物の様子をマザ／＼と見せてゐる。「三井礦山」「三菱炭礦」あるいは「北海道炭礦」「旭川炭礦」などと、各々の社名とマークを染め抜いた旗を押し立て、十組も十五組も二十三人位、あるいは四五十人位と、その旗を中心に輪を作つてうづまつてゐる。中年も有り、若きも有り、皆、何の希望も無さうな、人生に疲れ果てたと云つた眸に、むしろ何か不安氣な様子さへ見せて、互ひにボク／＼と話しかつてゐる。指先のタバコが指を焦しそになつても、未だ捨てられる様子もなかつた。

買った菓子を別けて、子供の兄弟喧嘩をさばいてゐる貧しい姿の内儀さんや、背なの子供に、何かちぎつて肩越しに喰

べさせ乍ら、子供がボロ／＼と肩先きからこぼしたものを摘んで口に入れてゐる惨めな服装の妻君などと、皆、今にも泣き出しでもしそうな表情だつた。男は男で殆んどがオーバーをまとつた者もなく、色あせた背廣の下に、襟巻を高く首にまとい、服の襟を立てた様子が、一層彼等を寒く見せ、帽子も冠らぬその頭は、いつ理髪したのさえ判らないのが多かつた。中には、和服の着流しなどと云ふ簡單なものさえ有つて、殆んどが今日の青森の雪の日に況して、北海道の是からの寒さに、とても堪へられそうにも思はれない装ひだつた。

それ／＼の旗印の中央に、それ等の引率者格の男が居たが彼等丈が揃つて、毛皮付きの厚いオーバーに、寒さなどは何處吹く風と云つた様子にゐた。

待合室のガラス戸越しには雪が小止みなく降りしきつてゐるスド／＼の設備もない待合室の中文に、澤山有る賣店の中でも隅のうどんな丈が良く賣れた。黒山にたかつて、入り變り立ち變り、自分で兩手に二ツ、テーブルにどんぶりを運んではデユルリ／＼と吸つてゐる。

併し、そのうどんなも買つて食へる様な連中は未だ良かつた中には殆んど無一物で、東京を出發した様な連中は、人々の變り／＼に食ふ様子を、只傍らから眺める丈だつた。

「お母ちゃん、うどん喰べさせてよ。ねえー僕、お腹が空いちまつたあ、ねえーいゝでせう。喰べさせてようー」

小學生服の男の子がしきりに母にねだつてゐる。

「何を云ふんですよ芳ちゃん、汽車の中でさんざ、いろいろのものを喰べたくせに、無理を云つちや駄目よ。お父ちゃんだつて、お姉ちゃんだつて、ちゃんと黙つてゐるぢやないの、ね、もう少し経てば芳ちゃんも乗りがつてゐた大きなお船に乗れるんですよ」

叱つたり、すかしたりはしてゐたが、さすがに母親も無理もないと云つた眸だつた。

母親が口にした少年の姉らしい者の姿は、四邊りには一寸見られなかつたが、その子の父親が同じ木の長椅子に並んで掛けて、長テーブルに兩ひちを突いて頭を抱へ込んでゐた男が、妻の言葉にフト顔を上げて、何か少年に云をうとしたが、さもその氣力も無さそうに再び深くうつ向いてしまつた。

その親子から五六間の窓際に、是も十五六人の團體が有つた。只此の連中が、他の團體と異つてゐるのは、他の團體の人々の暗い感じとは異つて、此の連中丈は至極朗らかそうだつた。互に冗談を云つたり、ふざけ合つたりしてゐる。

年も大體、二十二から二十七八の、いはゆる血氣盛りの元氣者ばかりだつた。それに此の連中には、背廣上下丈なぞと云ふ服装は見當らず、彼等の全部が、品の良し悪しは別として、皆キチンと冬オーバーに身を固めてゐた。下着にも純毛のセーターか何かをのぞかせてゐて、皆身ごしらへもキチンとして、中の數名は、黒皮長靴に足をかためてゐる。

中に一人、一同から「兄貴」「兄貴」と呼ばれてゐる男が

有つたが、是が此の一行の監督者で春日將三と云ふ二十八才の青年だつた。彼は窓を背に腰掛けて膝に乗せた小型のトランシクを台に、連絡船の繪はがきに、何かしきりに萬年筆を走らせてゐる。大柄の男で、厚いオーバーの襟を立て、中折帽子を一寸あみだに冠つた様子は、目に一寸、ケン是有るが仲々の好男子振りだつた。

その春日の傍らにトランシクに腰掛けた、是れもキリツとした顔立ちの、年頃は春日より一ツか二ツ位下か、一同から「岡村」と呼ばれてゐる男が居たが、するめを破き乍ら春日に言葉を掛けた。

「兄貴、四時迄待つんぢや、やり切れませんね。」

「全くだなあ。」彼はそう答へたが、別に大して感じもしない顔付きに、書終つた繪はがきを、傍らの一人に命じて、待合室の中に有るポストに入れにやつたが、屈託の無い表情に、かくしからさくらの箱を出して一本を口にした。

傍らから二十五六位の一人が、
「全くやり切れねえな。寒さは寒し、グツと一杯、しつかけでえや」

別の一人が、

「ヘン、酒處か、タバコだつて、空箱がなければ賣りませんときたぜ。大がい、うんざりしたよ。」

彼の言葉に春日が口を入れて、

「併し勝、それが當り前かも知れないぞ、おきに、東京でも

そうなるだろう。」

「そうでせうかね。併し、賣店の女、妙な云ひ方をしやがるから、腹が立ちましたよ。」

別の二十三四の若いのが、

「でも、賣店に一人いゝ女が居るな。」

岡村がウス笑つて、

「又、英三がはぢめやつたぜ。でもあの女にはかなうまい」口にするめを含んだ顔で、一寸離れた隅の方をしゃくつて見せた一同の視線がその方に向つた。成程、十三三間先の腰掛に、膝に風呂敷包を乗せて、シヨールに頸をうづめた一人の娘が居た。確かに美しい器量だつた。

英三と呼ばれた男が、

「本當だな、今迄氣が付かなかつた。岡村の兄貴は仲々目が早いなあ、一人旅かしら……」

「英三云やがれ、あんなキレイな娘が一人で北海道なんかえ出掛けて見ろ、それこそ、熊に食い殺されらあ。」

岡村のその言葉に、若い連中もはしやいで、

「全くだ。此の待合室にも此の通り、熊がうよ／＼してゐるんだからなあ。」

皆、美しい娘を見出した事で、如何にもそれが嬉しそうだつた。春日は別に口も爽さまず、タバコを口に、笑みを含んで一同の言葉を聞いてゐる。

「併し、娘は娘だなあ。」

かつたな。」

笑ひ乍ら、フト目を轉じた春日の、前で、母に、うどんをねだつてゐる少年の姿が彼の目に入つた。

「ねえ、お母ちゃん、喰べさせてよう。ねえ、いゝでせう」

「まあ芳ちゃんは何らないのねえ。いゝ加減にしないよ」

困じ果てた母親が、フト、こちらに目を向けたが、春日の視線にぶつかる、慌てゝ恥入つた様に、子供の耳元に口を寄せて、ソツと小聲にたしなめてゐる。

春日は傍らの一人に聲を掛けた。

「惣一、うどんをハッばかり買つて来て呉れ。」

彼の言葉に、雜誌に見入つてゐた二十四五の男が、返事と共に立上つて、

「清次に池田、それからもう一人誰か来いよ。」

傍へ聲を掛けて、「O.K」と、立つた是も大して年も違はない他の三人と共に、うどん賣場へ出掛けて行つた。

二、春日將三と云ふ男

春日將三が立上つた。色の余り黒くない、男らしい顔立ちに、如何にもこんな連中の監督者らしく、きかぬ氣を眉宇に現はして、丈も五尺七寸は、らくにありそな、胸巾の廣いがつしりとした休付きだつた。ねづみ色のオーバーの下には黒い背廣。黒の乗馬ズボンに黒皮堅胴の長靴と云う、是が此の男の姿によく似合つて、只に好男子と云うばかりでなく、實にスツキリとした男らしいスタイルだつた。

「當り前よ。見ろ、アノいぢらしいスタイルを、」

「妙な云ひ方をするない。併し、いゝ女だな。」

「連れは一体どの野郎だい……」

實に目に立つ娘の美しさだつた。勢ひそれが、一同の話題に成つた。

「どうも様子が一人旅らしいな、北海道の親元へ歸ると云ふ寸法かな。」

「俺は急に、北海道が好きに成つちまつたよ。」

岡村がさすがに女の評さを打ち消す様に、話題を變えて、

「兄貴は北海道に居た事があつた様な話でしたね。」

「え、何故。あゝ、あの出發前の俺の話か、アハ、――實わなア、岡村、俺が北海道の様子に詳しいのわ、アレは俺の弟の受け売りよ。あんまり、みんなが今度の北海道の仕事を氣乗りがしない様だから、一寸、あんな事も、云つてみたのよ。」

「なんだ、そうですか。併し、弟さんと云ふと、どの人ですか。」

「岡村も知つてゐるだろう。俺の妹の夫の行本よ。アレが北海道生れなんだ。」

「あゝ、妹さんの御主人の行本さんね。アノ人北海道だつたんですか。――併し、妹さんと云へば、兄貴も來年は二十九なんだから、もういゝ加減にお嫁さんと云ふわけですね。」

「アハ、――、岡村に俺の嫁の心配をしてもらうとは思はな

ワイシャツ丈が純白で、襟元からのぞくネクタイも、仲々に好みの良さを思はせたものだつた。

ボタンを掛けぬまゝのオーバーに、乗馬ズボンの前かくしに両手を入れて、ゆつくりと少年に近付いたが、微笑みと共に言葉をかけた。

「坊や。お母さんを困らしては駄目だよ。」

そのまゝ、其の親子の前の席が空いてゐたまゝに腰を掛けた。子供相手の彼の腫は、實に優しいものだつた。

母親は彼に一寸頭を下げて、

「はい。お腹をこわしてゐるものですから、困るんで御座いますよ。本當にわからずやで——」

如何にも、人の好さそうな笑みを浮べて、テレかくしの客をした。

「おい、くつです？」

「九ツで御座いますです。」

「そうですか。え」と、では二年生ですね。——北海道え、いらつしやるんですか……」

「はい。——主人が、あちらの炭鑛で四ヶ月程の約束で、働く様に成つたもので御座いますから——」

と、云ひ憎くそうに云ふ。傍らの子供の父親も顔を上げ、彼にコクリと頭を下げて、

「貴男もやはり、あちらで御座いますか？……」

「ハア、僕も炭山に行く者です。併し、僕の方は機械の取り

付け工事に一寸行つてくる丈なんです。」

「では、炭鑛の方やあないんで御座いますね。——ぢきに御歸りになるんで、——結構で御座いますなあ。」

一寸口を切つたが、やがて何か思い切つたふりに、

「併し旦那、何で御座いまするか。炭鑛へ入りましても、歸りたければ四ヶ月位で、歸れるものを御座いまするか？」

如何にも不安の様子にきいた。

「さあ、それはその時の契約にも寄りますが、よく、前借りなんかやりますが、金さへ借りてゐなければ、炭鑛だつて一般の工場だつて同じ理屈ですよ。」

「成程、それで御座いますかね。」

又も心配氣に考え込んだ。子供の母親が口をはさんでこぼす様に、

「ですからお父さん、云はない事や有りませんよ。妾がアレ程、駄目だからと云つたのに借りるんですもの。」

「何を云うんだよ。アノ場合、借りなければおつかなかつたのは、判つてゐるぢやあないか。」

「ですけれどもさ、もし歸れなくてもなつたら、此の子や静子が可愛そうぢや有りませんか。」

「歸れないなんて、莫迦な事が有るものかい。」

と、答へはしたが、併し、力なく自信もなげな少年の父親を、改めて彼が見直せば、もう年も、五十路の坂を三ツ四ツは越えたらしい、オーバーもまとはぬ寒そうなの肩先き、

何處か体でも悪いのでは無いかと思はれる様な、その骨格と

顔色を見ては、どうしても炭鑛ばかりか、何をやつても、先づ労働仕事は無理だと考えられた。妻君さえも、四十の上は五ツや六ツは出てゐ様が、末だ年と云うでもないのに、苦勞のせい、是も相當のやつれを見せてゐる。

惣一と他の三人が、兩手に一ツづゝ、うどんを持つて、春日の傍に来て、

「兄貴、はどうします……」

「うん、こゝえ置いて呉れ。」

「ヘイ」と、テーブルに、彼と少年の間に、どんぶりを並べて、一掴みの割箸と共に置いて行つた。

「さあ、坊やお上り。小父さんも喰べるよ。坊やのお父さんもお母さんも、上つて下さい。」

母親が驚いた様に、

「まあ、いえ、とても御座いませんですよ、皆さんの召上るものを。」

「いえ、はぢめから坊やに取つたんですから。さあ、冷めないうちに上つて下さい。」

父親が口を開いて、

「それで御座いますか、ではお時、せつかくだから御遠慮なしに戴こうぢやないか。芳坊、小父さんに、ちゃんとお禮を云つてから頂くんだよ。」

もう、少年は、手に箸を持つた儘、兩手の掌をどんぶりに

當てゝ、うどんの温みを味はい乍ら待つてゐたが、

「小父さん、有り難う。」

云ふなり、ちゆり／＼と吸い出した。

母親が氣まり惡氣に、

「いやですよ此の子は。芳ちゃん、頂きますはどうしたの」

「アハ、いゝんですよ。」

彼も親子と共に箸をとつた。彼は少年の父親に顔を向けて

「それで何ですか、炭鑛へ行くのに余程借りたんですか？」

「へえ……三百圓程で御座いますが、如何なもので御座いまするか？……」

「ほう……、三百圓ねえ。」

春日は不思議に思つた。實は彼は、横濱の某鐵材工事請負會社の出張工事の監督をしてゐる男だつたが、そんな職業上彼もいつか、炭鑛就職などにも一通りの常識を持つてゐた。春日が妙に思つた事は、國營の紹介所を通じて、三百圓なぞと、締つた額の金を貸す様な會社は有るわけは無し、此の夫婦が、既に許されてゐない筈の、一般募集で買はれて來たものに違いないが、そんな募集での三百圓の借金は、此の体で況して家族を抱えては、まあ、辛棒しても、何だかんだと、先づ半年位は、まるたゞ働きの様にしなければならぬと、そんな事を考えたが、春日にはハツキリと、それを聞かせてやる氣に成れなかつた。話せば、此の人達が力を落しきるのが判り過ぎてゐた。

母親が、しきりに後ろを振り返つてゐたが、隅のベンチの先程、春日のグループの話題に成つた美しい娘が、こちらを向くのを見ると「しいちゃん」と、小聲に呼び乍ら、手招きをした。

娘は、母に呼ばれて、訝つた表情に、包を胸元に近付いたが父母の前に知らぬ男が、共にうどんを食つてゐる様子に、一寸ためらう様子だつた。併し、母親の小聲で、手つとり早い説明に、淋しげな表情と共に肯づいた。肩掛けを取つて、春日を頭を下げ、

「済みません。御迷惑を掛けまして。」

低い聲に禮云つて、母の隣りにソツと腰を下した。春日も軽く頭を下げて返事に變えたが、只、此の娘が、此の夫婦の子とは思わなかつた丈に、先程の一同の無遠慮な噂話が、此の両親の耳に入りはしなかつたかと、一寸体裁の悪い思いをした。

彼が食い終つて、ハンカチに口をぬぐつてゐると、彼女も母に並んで掛け、父母に勧められて、小聲に禮を云つて、一杯のうどんに箸を付けた。少年も嬉しげに、母や姉に笑はれ乍ら、二杯目のうどんに手を掛けた。

春日の傍に、英三が近付いてさゝやいた。

「兄貴、もつと、うどんを買つて来ませうか」

春日は笑ひ乍ら、

「アハ、うどんはいゝから、するめを二把ばかり買つて

云つた感じの娘だ、なぞと思つたりした。二十を出ても、ほんの一ツか二ツ位のものだらう。

たばこをくゆらし乍ら、何気なしに見入る春日の瞳に、つましそくに箸を置いて、フト、上げた自分の瞳がカチ合ふと、ポツと頬を染めるのだつた。

フト、春日が見返ると、自分の居た席の方で、一同が春日と彼女を見比べ乍ら、嬉しそうに眺めてゐたが、春日の視線にブツかる、と慌てゝ下を向いて、靴の紐を直したり、たばこにマツチをすり付けたりして、テレかくしに何かガヤ／＼やつてゐる。

(三) 第一の争い

賣店から戻つた英三が、大きな束の束を二把、春日の前に置いたが、その英三も、彼女に瞳をチラ／＼させ乍ら、兄貴がもつと何か用を云ひつけて呉れゝばいゝが、と云つた様子に、彼も名残り惜しげに、娘に一瞥をくれて席に戻つて行つた。

春日も英三の氣持が可笑しくて、微笑を口に上らしたが少年に、

「サア坊や。是は船と汽車の中で喰べるんだよ。北海道の汽車は、車の中にストーブが付いてゐるから、焼いて食えるから大丈夫だ。」

少年は、食べ物えの子供心に、歡びを満面に、するめを母の前にすらしてゐた。

来て呉れ。」

「ヘイ／＼」と英三は嬉しげに、でも一寸、テレた様に、仲間の方えもニヤ／＼し乍ら、人混みを別けて、賣店の方へ近付いて行つた。

春日が何気なく娘を見れば、如何にも寒げな父親や、銘仙ものゝ、縫い返し羽織を着た母親の姿に比べて、コートこそ着てゐなかつたが、さすがに娘には、未だ新らしい、お召銘仙の黒地に大きく、菊と葉を原色にあらつた着物と、羽織のついでを着せてゐる。帯は名古屋帯らしいが、未だ、いくらかも締めてゐないもので、白地に小櫻を散らして、赤と黒の御所車の重ね模様に、黒の車の縁文に、金糸を縫い取つた美しい柄で、赤と白のより別けの帯止めも、帯の賑やかさを引き立てゝゐる。エンズの細い羽織の紐が、如何にも娘々しうい／＼しかつた。

成程、色の白い美しい娘で、背もすらりとして、良く均勢のとれた姿だつた。黒い髪の毛に形良い眉毛、長いまつ毛の下に涼しい瞳、嫌味もなく通つた鼻筋、紅い可愛い、口唇も、つましく愛らしかつた。軽く、バーマネットして髪のを、襟元からふつさりと斷髪型にして、内側へと折りかくしてゐる。

別に春日には、着物も髪もハッキリと吞み込めたわけではなかつたが、確かに美しい人だとは感じたし、もし此の両親や弟と、別にして見たならば、良家の令嬢の一寸した外出と

くど／＼と禮を述べる両親の傍で、娘が、サモ、弟をいたわりげな、優しく嬉しげな瞳を見せてゐた。

春日はタバコを手少年の父親に、

「何か大分、事情もお有りの様ですが、三百圓と云ふ金も、是を勞働で返すとなると、一寸、大變ですね。」

「左様で御座いますか。――實はお世話下すつた人の話では、食費は安いし、住居は只だし、二ヶ月もすれば返せる様な事を云つて呉れたんで御座いますけれど――」

春日に勧められたタバコを取つて、有りがたそうに一服つけた。

春日に語つた話は、こうだつた。

彼は名を大村清蔵と云つて、遂、一昨年迄は下谷で靴商を營んで、中年からの資本營業では有つたが、場所と時代に適合して、相當の成績も上げてゐた。小さい乍らも工場は別に獨立さす程の繁生振りで、下谷でも、竹町から三味線堀にかけて、大村靴店と、かなり目に立つ店に迄仕上げたものだつた。

處が、先年の皮革品の統制にぶつかつたのが打撃のはぢめだつた。それは、デツと堪えれば堪えられたかも知れなかつたが、前途を悲觀的に見たのは清蔵ばかりではなかつたのだ。彼もやはり、轉業々々の人の言葉につれられて、フト手を出した某化學工業に投資したのが蹉きで、それから先がいけなかつた。

投資した事業は何の成績も上げず、逆に金を食う一方で、遂には彼も大きな負債さえもしい込み、果は下谷の店も工場も人手に渡り、その後は何だかんだとの不幸続きで、遂には事實其の日にさえ窮する様な状態に成つてしまつた。丁度其の頃、女學校を了えた娘の靜子が、自分から新宿のあるデパートの賣子に成つたが、彼女のもたらす四十圓や四十五圓の小額では、到底一家はやつてゆけるわけもなかつた。況して、律氣の清藏は、家財を擧げて借金に充當さす様な事もしでどうにもならなくなつた此の一家に、フトもたらせられたのが此の北海道の炭鑛の話だつた。それは炭鑛の事情も、莫然とでも知らぬ清藏でもなかつたが、金も借りてゐたさる人から、

「炭鑛と云う所は、政府が干渉して、賃銀は高くて確實だしそれに文化の施設も仲々行き届いたものだそうで——」

と、勧められ、それに住宅や、施設の寫眞入のパンフレットなども見せられ、食費低廉、住宅無料などの文句に頼つて、

「まゝよ、永年住んだ土地で恥をさらすより、いつそ北海道に渡つて一稼ぎしてみよう」

と、そんな氣持ちから、遂に今度の成行に成つたのだ。東京と北海道を往復する、人夫引率者の大島と云ふ男に、證文を入れて借りた三百圓の金も、あらまは返金に振り向けたりして、出發の當日迄には、その金も殆んど残つてもゐ

なかつた。上野驛を發つ前には、家族一人に三十圓づゝ、合計九十圓を給與するからとの、大島の言葉に、せめて、それを便りに出掛けて来たが、上野驛でも、その金を渡される様子もなく、車中で大島にその約束の金も請求したが、今度は「現地に着かなければ渡す事は出来ない。それでなくともお前さんには貸し過ぎてゐるのだから——」

との、取り付く島もない返事だつた。實に、先の思いやられる今の状態だと語つた。

デツと聞いてゐた春日も、心から此の人達の前途を案じてやらずにはゐられなかつた。春日の氣持ちとしては、實に、「止めたらどうだ」と、云つてやりたかつた。彼は懷中に相當の金も持つてゐたので、その位の金なら、此の親子の方針を誤らせない爲になら、自分が出してやつてもいいのだがと迄考へだが、なまぢ、此の美しい娘の出現に、却つて妙な拘わりが出て、さすがの彼もそれを率直に云い出す機會を失つた。

「サア、坊や。汽車の中でお小使だよ。」

彼は、少年の手に、二枚の新しい拾圓紙幣を握らせた。

驚いた様に夫婦が、彼に禮を云い終つた頃だつた。ドカ／＼と、三、四人の男達が彼等の傍に近付いた。中の一人が、

「オイ／＼親父、つまらねえ所で、くだらねえ事をしやべつてゐねえで、ちゃん、みんなの所に來てゐたらどうだい……」

さすがに、春日には顔を反向乍ら、清藏に向つてガミ／＼

とあびせかけた。

先程、娘が居たあたりに屯ろしてゐた「××炭鑛」行の清藏の同行の者達とはすぐ判つた。

急に窓際の一團の中から、尖つた聲が上つた。

「やい、つまらねえ所とは何でい……ナメた口をきくと承知しねえぞ！」

それは、喧嘩早い、山田の聲だつた。

「ふざけやがんな——」

喚く様に付け足したのは、勝らしかつた。

彼等も先程から、清藏の話に耳傾けて、みんなが一樣に、此の家族に同情してゐた最中に、その男達の妙な言葉と、それに、如何にも人買いと云つた感じの彼等の態度には、余計彼等も反感を募らせた。

「何を承知しねえつて……」

男達も硬張つた表現に振り返つたが、既に立上つて、嘔みつきそな表情で、デツと自分達を睨め付けてゐる一同の、本腰の様子を見ると、一寸後の文句が續かなかつた。

その時、既に人だかりした後ろの方で、

「何をぐつ／＼云つてやがんだ！」

と、大きく喚いて「どけ／＼……」と、人垣を肩で別けて、

前に出て來た男が有つた。

是が、評さの大島だつた。その姿に、靜子が怯えた様に母の肩にすがつた。

大島と云ふ男は、見るからに粗暴な感じて、洋服に半ズボン、茶の短靴と云つた姿で、如何にも喧嘩願ひした着こなしの三十四五の男だつた。眉毛に食い込んでゐる傷跡が、此の男を一層凄く見せてゐる。

「あゝ、兄貴だ……」

と、大島方の三人が頼母しげにそれを迎えた。大島は春日には目も向けず、口から唾を飛ばして目を怒らせ、

「ヤイ、今こたくを並べたわどの野郎だ。出ろ、ふざけやがつて！」

と、窓際の一團に向つて喚いた。

「よし、俺がやつてやる……」

岡村が、決心した如く前に出た。

「をう、俺は日暮里の三郎（サブ）つてんだ。やつてやるから來い！」

喚み返す岡村の後ろから、清次が急いで、彼のオーバーを抜がせた。春日が無言に、皮手袋をはめて立上つた。

「岡村、よせ、……」

と、低く止めてから、岡村の体を胸でさえ切る様にして、相手の男を振り返つて、

「あゝ君、なんでもないんだ。引取つて呉れ給え」

「何ヲツ……何でもねえつて、何がなんでもねえんだ。北海道には北海道のしきたりが有るんだ——。横から、ヘンな甘つたれた眞似をされて黙つてゐられるけえ。うぬ等、北海道

の大島を知らねえな」

づか／＼と前に出て、如何にも自信有りげに、春日のオーバーの襟をグツと掴んだ。

「手めえの身内なら、手前が相手だ！」

大島は目を怒らして、掴んだ春日の襟をグツと引いた。

春日の瞳がキラツと光った。併し彼は、尙ほも靜かに大島を見つめて、

「子供にうどんを御馳走したのが、そんなに君の氣に入らないのかい……」

「何ナツ！ ナメるなッ！」

大島は、いきなり、春日のあごのあたりに一撃を喰らわせた。春日は素早く身をねつて、それを變して、

「お互に、つまらねえ眞似はよそうぜ……」

大島は、それにも答えず、春日の顔を目がけて打つてかゝつた。春日は、グウンと大島を突き離すと、

「野郎、見損うな！」

喚いたかと思うと、右手のメリケンが、バーンと大島のと鼻の間に飛んだ。

「ウッ」と叫んで大島は、二間も後ろへ人垣を崩してアツ倒れた。實に、素晴らしいと云える程の春日の腕力だつた。

「喧嘩わ、こうやるもんでいい！」

惣一が、まるで一同の氣持を代表した様に大きく喚いた。「野郎、やりやアがつたな……」

と、大島は起き上つて、内がくしから、さして長くはないが、光つたものを取り出して、それを右手に、今にも春日に飛びかゝろうとの氣勢を示した。顔はもう鼻血で、眞赤に見苦しく染め、見る／＼口唇が紫色にもれ上つて來た。

春日の前には、もう岡村、山田、勝、惣一、英三、清水、杉井、池田と云つた元氣の若い者十四名が、ぐるりと春日の前に立ち塞がつた。もう、オーバーを抜いてゐる者、素早く腕時計を外してゐる者など、皆硬わばり切つた表情に意氣込みきつて、大島等を眺（ねめ）つけてゐる。

春日は、軽く腕を組んで突立つてゐる。極めて自然の形で彼も周囲も、實に順れ切つたものだつた。

大島の周囲にも、後からの者等と共に、七八名の男達が集つたが、見せられた春日の腕力や、彼の周囲の、あえて勝負を辭せずとの面付きに、一寸勝手が違つてか、

「兄貴、場所が悪い。」と、しきりに大島をなだめにかゝつた。大島も、不利と悟つて、その止め言葉に幸に、只顔丈は無念の形相に、

「野郎！ 覚えてゐろ……いづれ禮するぞ！」

と、お定まりの捨て臺詞を残して、人垣を分けて洗面所の方へ消えて行つた。三人ばかりがそれに付き従つてゆく。

清藏等は残つた四五人にせき立てられて、春日に挨拶する暇（いとま）もなく、引き立てられる様に去つて行つた。芳夫迄が怯えた様に母の手にすがつてゆく。靜子はチラと、春日を見返つて、悲しげな瞳を彼の瞳にからませて行つた。

春日をはちめ一同は、只無言にそれを見送るばかりだつた。連絡船の出船には、尙、三時間余りを待たねばならない。

【短歌】

愛 憎

瀧 端 滋 子

日面てに和む枯原歩み來つ愛憎と云ふに思ひ懣れぬ

窓に我が何惜しみ思ふおぼおぼと上弦の月匂ふぬくとさ

湯の香まだ匂ふ肌のかなくであかねす道は迂回して來つ

やみ易くこもり寂しき部屋にして水仙の葉も黄に染みて來ぬ

枯れ行くはすべな見守りつくづくに生命思ひてせつなかりけり

孤獨さは花にかも云ふ明暮れの慰まなくに、なへてうつぶく

白銀の月細うしてつばら枝にかゝれる夜べは霜凍るらし

夫を戀ふ一日の果や寒々と暮色づきて雨戸引く音

今更らに何を云ふべき心決めてひとりの道に入り行かんとす

ドビツシイの曲の流れよ只管にラジオが前に無心たらんとす

謹賀新年

昭和二十四年元旦

縣會議員 小野義一

福島縣小名濱町
電話（小名濱）六番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

富ヶ浦病院

院長 安田善一

福島縣小名濱町中坪
電話（小名濱）三三番

會員錄

昭和二十三年
十二月十五日現在

特別會員 (敬稱略)

日本水素株式會社ノ部

社長

莊野精二

常務

志摩英一

常務

照井總治

取締役

大場囀雄

取締役

橫井重光

監查役

田所美徳

臨港鐵道株式會社ノ部

事務取締役

浦田文二

取締役

眞木弘

小名濱港灣運送株式會社ノ部

西丸猛

取締役社長

清水貞一

事務取締役

柳内庄八

取締役

澤田留之助

監查役

西丸芳郎

市中其他ノ部

(イロハ順)

小名濱町藤田組

石黒伊三郎

同町會議員

林照平

平市五ノ四

羽田野照

小名濱町中坪

富ヶ浦病院

縣會議員

小野義一

小名濱町會議員

小野直千賀

全境町

小名濱鐵工組合

小名濱町會議員

藁谷寅之助

全小龍鎮泉

渡邊勉

全町會議員

金子磯五郎

全金子建鐵株式會社社長

柏浦角治

全驛前惠比須屋食堂

吉田鐵治

吉鐵商店

田中吉之輔

全奥ノ松農場

瀧澤松儀

全瀧澤材木店

坪内清

全町會議員

坪内清

正會員ノ部

(イロハ順)

内郷町宮鬼澤

奈良定夫

小名濱町橋本

六笠亀之助

全ラセン工場長

村上治男

全内田建設株式會社社長

内田清吉

全本町

黒澤清院

全下町草野組

草野惠正

經路料鑛業株式會社社長

前野碩

小名濱町船引場

福尾伊太

全藤田組

藤田喜次

衆議院議員

齋藤晃男

小名濱町丸濱運送店

里見可雄

全測候所長

佐藤秀雄

福島縣燃配株式會社

鷺幸江

小名濱出張所長

菊地義勝

小名濱町錫揚鐵網組合長

三代義治

小名濱町清水工業所長

清水秀雄

小名濱町會議員

鈴木正

內 南 中 中 中 中 中 中 永 中 長 長 長 根 根 坪 土 瀧 瀧 武 丹 丹
藤 羽 西 野 野 野 野 村 村 山 川 瀬 沼 沼 本 本 井 屋 部 內 端 田 野 野
文 一 信 政 信 久 八 吉 作 三 幸 武 敏 平 正 滋 好 貞
司 春 彌 子 夫 正 郎 子 藏 馬 明 弘 郎 男 郎 夫 昭 內 銀 一 子 雄 雄 茂

金	金	金	金	加	加	加	上	川	垣	川	柏	菅	鹿	若	渡	渡	渡	大	大	大	大	大
成	成	田	古	藤	藤	藤	遠	野	越	添	田	浦	野	島	松	邊	邊	邊	和	田	鹽	木
鐵	鐵			藤	晴	一	安	助	常	貨		ッ	長	四		勝	常	三	淺	義	福	信
工	工											ネ										
誠	所	寛	子	雄	樂	實	次	直	一	店	豐	子	壽	郎	務	男	子	之	吉	美	三	隆

五四

[illegible]

佐佐佐佐佐佐佐佐阿秋東東東東天相阿安青會赤秋
久
藤藤藤藤藤藤藤藤津山 川澤部島木田坂葉
愛セ 和門政 喜徳武正建明長義久庄正三俊義長道
四 七
子ッ仁子彌治壽一郎男雄二一郎將雄一男郎二弘廣雄

野口	野口	能坂	内田	内田	植松	宇佐美	運賀	運賀	鶴ノ木	上野沼	上野台	植木	雅樂川	薄羽	村田	村田	村田	村田	村山	村山	中島	永井
重男	浩一	孝二	陸雄	岩雄	武淳	清次郎	マツ	半之助	久幸	金之助	千代八郎	勝二	健次	和義	修資	房夫	正三郎	繁雄	昭一	昌伸		

松松松町曲馬馬柳山八矢山山國桑草草草草草野野野野
田
本村原田山目目崎代部本中井名野野野野木木崎部
五光壽澄ス良玉孝秀廣哲保勝宗三良新シハ太
郎健雄枝イ雄一子武郎吉雄治英明芳雄太衛ンナ浩郎

[illegible]

宮宮宮宮水木木木菊菊菊菊酒崎鷺澤佐佐佐齊齋齋齋
川野内内野村村村地地地地井村田川川川藤藤藤藤
福利太忠峯芳徳修俊テ幸清喜久清カ定
次ツ四
松春郎吾治夫一二雄子薫郎正一信豊義助操光子享造

發刊の感想

小野 豊

入會を厚く御禮申上ます。會員
 参百名を持てば、先づ成功と考
 へて居りましたが、皆様の御協
 力に依り幸に發行部數五百を持
 つ事が出来ました事は、實に喜
 びに堪へません。併し小名濱
 だけでも未だく御入會願へる
 方が居られる事と存じます。今
 後共益々本誌が發展致します様
 皆様の雜誌、郷土の出版に成る
 雜誌として、一層の御援助を心
 からお希い申上ます。尚一港の
 灯」を御存知の無い方へも廣く
 御紹介下さい。思へば、前にお
 手元に差上げた印刷物だけを御
 覧に成つて、入會下さいました
 方々は、實によく有ると
 感謝して居ります。こゝに會員
 の皆様の前に我々發起人が心か
 ら誇りとして、意を強くする事
 の出来たのは、本誌に東義將
 氏の在る事です。東氏に就いて
 は同氏とその作品に就いて、同
 人新妻渡氏が執筆して居ります
 ので、詳しくお話しませんが
 實は私の事を申せば、私は始め
 から同人雜誌を考へた譯では成

かつたのです。

東氏の小説やその他の作品を
 良く知る私は、どうかして東氏
 の作品を世に知らせたい事が願
 ひだつたのです。私や同人檜山
 氏の考へでは、我々の手に依つ
 て、東氏の小説の一冊化を東氏
 に勧めたものでしたが、同氏が
 至難で有るとして實行に移され
 成かつたものです。幸に本誌發
 行となり、小名濱を中心とする
 會員の皆様の中心とする
 會員の皆様の機上にくぐり入れ
 ても、決して不自然なもので成
 い事を、信じて、廣く自分達の
 郷土の雜誌「港の灯」普及を心
 から願ひ申上ます。
 皆様の御投稿をお待ち致して居
 ります。
 創刊號の批評も歡迎します。
 尚、御投稿の切は、何卒原稿用
 紙を御使用の上、住所氏名を御
 明記下さい。

編輯後記

創刊號の出来に就いては、種
 々お説も有る事と思ひますが、
 自分としては、是がせい一杯の
 努力で、是でも原稿書き、會員
 募集、編輯、校正、印刷所通ひ
 等、文字通り不眠不休の有様で
 した。何卒御諒承下さい。實は
 發起人十名の名は有りますが、
 發起人十名の名は有りますが、
 折り載いた以外は、一切の事に
 誰方からも、お力をお借りして
 居りません。自分はお話するも
 のではなく、凡ての責任は我に
 有る事を申し上げ、又必然として
 来る赤字に對しても、迷惑の累
 を取らぬに對して、又必然として
 敢て茲に附言する次第です。併
 し今日を見ました事は、全會員
 の御好意の結合で有る事は云
 迄も有りませんが、特に清水工
 業所長清水秀雄氏の發足に對す
 る御盡力、柏浦治氏の資金の
 おおき、四家兵一郎氏の萬一に
 備へての激勵のお言葉等、もし
 此の三つが伴はなかつたらば
 おそらく本誌の出版にも、大き
 な影響が有つた事を思い、茲に
 上記三氏に對し、紙上厚く御禮

申上げて置きます。次に會員諸
 兄に發起人、即、同人とする事
 を得なかつた事を御諒察願ひ、
 今後は會員寄稿者の中にも同人
 を求め、永く本誌への投稿を懇
 請するつもりで有ります。
 東 義 將

文藝と娯樂と郷土の言論機關

同人雜誌「港の灯」

主幹	東 義 將
同 人	新 妻 渡 氏
同 人	四 家 兵 一
同 人	近 根 本 一
同 人	小 野 浦 正 敏
同 人	天 鶴 山 久 久
同 人	川 沼 幸 雄

毎月一回 二十五日發行
 投稿切 毎月十日
 原稿、文筆ニ關スルモノ凡テ自由
 入會金 四十圓
 會 費 六十圓

福島縣小名濱町船引場四三
 編輯人 東 義 將
 福島縣平土丁目二九
 印刷所 平 活版所
 福島縣小名濱町船引場四三
 發行所 同人雜誌「港の灯」社

謹賀新年

昭和二十四年元旦

小名濱港灣運送株式會社

取締役社長	西 丸 猛
專務取締役	清 水 貞 一
取 締 役	柳 内 庄 八
監 査 役	澤 田 留 之 助
監 査 役	西 丸 芳 郎

本社 福島縣石城郡小名濱町辰巳町
 電話小名濱一七四番二六四番

謹賀新年

昭和二十四年元旦

小名濱臨港鐵道株式會社

專務取締役 浦田 文二郎

取締役 眞木 弘

本社 福島縣石城郡小名濱町辰巳町

電話小名濱 二八番二三〇番
二九一番

三猿一庫

昭和二十三年十二月二十五日印刷
昭和二十四年一月一日發行

同人雜誌「港の灯」 第一卷第一號

7286